MESA/BOOGIE®

MARK 5
TWENTY-FIVE™

取扱説明書

Hello from the Tone Farm

MARK FIVE : 25は、発表から35年もの歳月が経った今もトップアーティストとともに音楽のトレンドを築き続けているMarkシリーズのサラブレッド(純血種)として誕生しました。1台のアンプとしてはあまりにも多くの回路とサウンドを持つこのアンプは、MESA/Boogieの生きた伝説です!
MARK Iはカスケード・プリアンプを内蔵したハイゲインアンプとして世界にリリースされ、MARK IIは当時世界でもっとも優れた、ハイゲイン・デュアルモード・チャンネルスイッチングアンプとして広く知られました(その後サイマル-クラスパワーの兄弟機種が誕生しました)。MARK IIIでは、フットスイッチで切替可能な3チャンネルアンプという時代に突入し、MARK IVではチャンネル単独での出力コントロールが可能となりました。
そしてMARK V(+MARK V:25)が過去45年のギターアンプの進化を体現したものとなっています。

Markシリーズはそのサウンドとキャラクターでステージ/スタジオでの使用に関わらず非常に著名なアンプですが、今回の25W仕様は単に極限までサイズが小さくなっているというだけでなく、より洗練・改良されています。そのゴージャスで輝くようなクリーンと迫力のあるハイゲイン・リードサウンドがアンプから出力され、それらのMARKシリーズのボイスがパワー部のペアのEL84管で生成されます。きらびやかでタイト、そして鋭いトップエンドのサウンドは、よりクリップしたサウンドが得られるように感じられます。歴史的遺産ともいえるMARKシリーズのアンプを低出力アンプの愛好者である新しい世代に紹介するにしろ、MARKシリーズの固定ファン達が夢見る超ポータブルなトーン・ドリームを叶えるにしろ、MARK FIVE: 25は今までで最も扱いやすいパッケージングであなたの情熱に火をつけることは間違いありません。

MARK 5
TWENTY-FIVE™

目　次

使用上の注意
概要 — 1-5
演奏を開始するには — 6
役立つヒント — 7-8

フロントパネル
チャンネルについて(モードごと) — 9-10
モードの詳細：チャンネル1 — 11-12
モードの詳細：チャンネル2 — 13-16

コントロール
INPUT(インプット)、FT SW(フットスイッチ、GAIN(ゲイン) — 17-18
TREBLE (トレブル) — 18
MID/BOOST(ミッド・ブースト)：チャンネル1 — 19
MID：チャンネル2 — 19-20
BASS(ベース) — 20
PRESENCE(プレゼンス) — 20-21
MASTER(マスター) — 21-22
5-BAND GRAPHIC — 22-23
MULTI-WATT™(マルチワット)出力 — 23
POWER(電源)スイッチ — 24
STANDBY(スタンバイ)スイッチ — 24

リアパネル
FUSE(フューズ) — 25
電源コネクタ — 25
FX LOOP(エフェクト・ループ) — 25-26
HEADPHONE(ヘッドホン) — 27
REVERB(リバーブ) — 27
SPEAKERアウトプット — 27-28
CabClone™D.I. — 28-30

サンプルセッティング — 32-33
ユーザー・セッティング・テンプレート — 34-35
真空管のノイズについて — 36-37
スピーカー・インピーダンス　マッチング/接続ガイド — 38-43
真空管交換チャート — 44
パーツ・シート — 45

使用上のご注意

この説明書を読んで下さい。

この説明書をなくさない様に保管して下さい。

注意事項を必ず読んでからお使い下さい。

安全事項にも従って下さい。

水の近くで当製品を使用しないで下さい。

汚れた時は乾いた布で拭いて下さい。

換気口を塞がないで下さい。説明書に従って設置して下さい。

暖房機器や、他のアンプなど、熱を発する機器の近くに置かないで下さい。無理やり、形の違うコンセントに挿さないで下さい。有極プラグは片方のブレードが幅広くなっています。アース付プラグは２つのブレードの他にアース端子も付いています。アースは安全の為のものです。自宅のコンセントに差し込めなかった場合、電力会社に相談して下さい。

電源ケーブルを踏んだり、曲げたりしないで下さい。

落雷の恐れがある時や、長時間使用しない時は電源ケーブルを外して下さい。

修理が必要な時は専門家に依頼して下さい。ケーブルがダメージを受けたり、本体が傷ついたり、濡れたり、落として壊れたりした場合、修理に出して下さい。

換気の為に本体の後ろに必ず10センチ程度のスペースを空けて下さい。換気口の上に新聞、テーブルクロスやカーテン、といった物を置かないで下さい。

ロウソクや火が付くような物を本体の近くに置かないで下さい。

濡れている物も本体の近くに置かないようにして下さい。

注意：安全のため、本体を雨や湿気に晒さないで下さい。

なるべくコンセントの近くに設置して下さい。

注意：必ず適切な接続をしてからアンプを操作して下さい。そうしないとアンプが故障する可能性があります。

直射日光や高い湿度は避けるようにして下さい。

必ずアースを接続して下さい。

解体したり、ヒューズやチューブを交換したりする前に必ず電源ケーブルをコンセントから外して下さい。ヒューズを入れ替える時は、必ず同じタイプのヒューズを使って下さい。

動作中にチューブに直接触れないで下さい。

子供に触らせないで下さい。

故障を避けるため、ケーブルなどを接続する前に電源を切って下さい。

汚れを取るのに溶剤を使用しないで下さい。

必ず本体の裏に表示されている条件を満たすAC電源を使用して下さい。輸出モデルは各国の電圧に合わせてあります。お住まいの規定に従って電源に接続して下さい。

大きな音が出ますので、スピーカーに耳を近づけないで下さい。

Mesa/Boogieアンプはプロスペック用の機材ですので、規定に従って扱って下さい。

上記の取り扱い注意事項と安全管理事項を必ず読んで下さい！

MARK 5
TWENTY-FIVE™
取扱説明書

概　要：

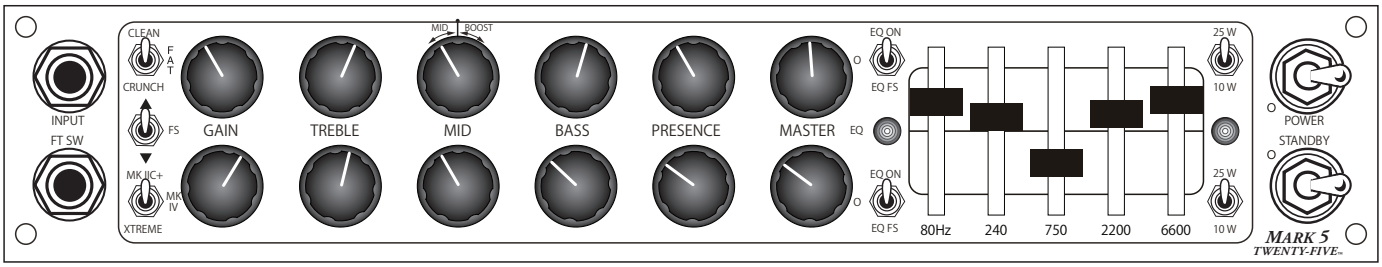
注意：このセクションは、MESA BOOGIEのホームページにも掲載されています。既に読んだという方は、読み飛ばして次の「演奏を開始するには」のセクションに進んで頂いても構いません。

MARK FIVE: 25のインスピレーションの元になっているのは過去のMARKシリーズですが、その中で最も誰もが切望するMARK II-C+について再考してみようと思います。我々はそのMARK II-C+と6L6パワー管のMARK V(MARK II-C+に敬意を表しながらも、MARK Vが今日までの最高の作品と考えます)を比較し、現行のMARKアンプがどのようなサウンドを生み出しているかを検証しました。その結果、MARK Vに搭載されている多くのモードをこの小さなパッケージに絶対に封じ込めるべきだと考えました。そしてそれはMARK II-C+と同等(またはそれ以上)のサウンドを奏で、その少しコンパクトなシャーシサイズに6つの素晴らしいモードがレイアウトできるように設計したのです。

意見を募った結果、サイズの小さいMARKアンプには、2つだけのプリアンプチャンネルを設けるべきとの意見が圧倒的でした。フットスイッチを使用すれば、個別にそして素早いアプローチで異なるサウンドが得られるので、MARK FIVE: 25を2チャンネル仕様とすることに同意したのです。そして我々はMARK II-C+やMARK IV、そしてMARK Vというベストコレクションを、この信じられないほど小さいサイズのパッケージに集約することができました。その結果が新しい基準(ベンチ"マーク→MARK")となり、あらゆる点で先人たちが作り上げてきた歴史にふさわしいプロモデルとして誕生したのです。

MARK Vが持っているスタイリスティックなトーンの幅と有用性、また攻撃性をパッケージングしたMARK FIVE: 25は、さらに独特の軽快さと勢いを伴っています。MARK Vのプリアンプ部とMESA独自のDyna-Watt™ 2xEL84管パワーセクションの組み合わせは、前例のない可搬性とクリップのしやすさ、そしてタッチの早い表現力を持ったアンプの誕生を可能としました。確実なのは、今日の"小型アンプ"のトレンドを経由しながら、今後何年か経った後にも、どんなサイズや出力であってもアンプとして無視することのできないサウンドの幅やクオリティを決定づけていくためにMARKシリーズの血統はこれからも続いていくということです。

フロントパネル：



リアパネル：

概要 : フロントパネル

プリアンプ

チャンネル 1

上段のチャンネル1は、MARK Vで採用されているMESAのベストなモードである2つのCLEANモード(CLEAN/FAT)が選択可能です。これらは３５年に渡って改良に改良を重ねられた、非常に音楽的に有効な、輝くようなローゲインのボイスを生み出し、ダイナミックかつ、新しい敏感なタッチを持ったクリーンサウンドとなっています。3つ目の"クロスオーバー"モードもチャンネル1で選択可能なモードであり、こちらもMARK Vから採用されています。

CRUNCHモードは、MARK Vのチャンネル2から採用されており、クリーンとマイルドなオーバードライブサウンドの中間となるミッド・ゲインをカバーしますが、アンプのパワーセクションとの組み合わせにより、その名の通り"より高めのゲインサウンド"を得ることができます。CRUNCHモードは、ほとんどのアンプよりも、より優れた価値を持つと言えます。何故なら、クリーンや少しプッシュされたマイルドなサウンド、またフルに歪んだサウンドといった多くの領域の移行部分を移動しながら、より広い範囲で表現力豊かで繊細なサウンドを生み出すからです。吼えるようなオーバードライブでブルーズを奏でたり、迫力のあるリズムサウンドを演奏したりまたは多重なゲインによるソロ演奏を行ったり・・・CRUNCHはその全てに応えます。また、MARK FIVE: 25でのCRUNCHモードは、その低い出力設定のため、低めの音量のときにパワーセクションをクリップさせると、サウンドのブレンド具合が強調されます。EL84管はトップエンドの倍音に特徴があり、低めのゲイン設定でも素晴らしいオープンサウンド、高めのゲイン設定ではきめ細かいブリティッシュサウンドを生み出すので、CRUNCHモードは非常に有効です。MARKシリーズのアンプの仕様の中でも最も使いやすいモードの1つでしょう。MARK FIVE: 25のチャンネル1は、ゲインや3つのモードの柔軟性を高める更なる追加機能があります。例えば、カルロス・サンタナのトリビュートモデルであるKING SNAKE™で初めて採用された、調節可能なGAIN BOOST(ゲインブースト)は、MIDコントロールの上半分にてコントロールを行います。

オリジナルのMARK Iアンプ ではON/OFFのスイッチ操作が可能であった(KING SNAKEでも)GAIN BOOSTは、MIDコントロールで調節可能なMID/BOOSTとして装備されています。MID/BOOSTコントロールの0から5までが通常の範囲でのMIDコントロールです。5から10までがMID/BOOSTで、オーバードライブの素晴らしい重なりが中域の広い範囲でゲインを強調し、厚みのある歪みを生み出します。このシンプルながらも信じられないぐらいパワフルなMID/BOOST機能(特許出願中)は、コントロールによってチャンネル１の３つのどのモードでも、微妙なレベルからかなりのオーバードライブまでゲインを追加できます。この増加された歪みは"クリーンサウンドのエッジ"に完璧にフィットし、プレイヤーがダイナミクスを加え徐々にクリップさせていく際にスムーズに移行することができます。またプレイヤーによってはCRUNCHモードの使用範囲が広がり、必要となるであろうオーバードライブを加えることが可能です。

また、ゲインが充分でないとき、CRUNCHモードを併用し、MID/BOOSTを高めに設定した10W出力モードで、実際迫力のある歪みサウンドが得られます(思い出してください、これはクリーンチャンネルです)！コントロールを動かした範囲だけサウンドが変化し、スムーズかつ温かみのあるオーバードライブサウンドが得られるのですが、MID/BOOSTコントロールとの併用で、チャンネル１がフル装備の(ハイゲイン)アンプに変化し、あらゆる音楽ジャンルでソロサウンドやオーバードライブしたリズムサウンドを演奏できるという巨大なポテンシャルを持っています。

チャンネル 2

MARK FIVE: 25のチャンネル2は、MARK FIVEアンプに装備されているチャンネル３のプリアンプを完全に再現したもので、それは全てゲインに特化しています！３つのモード全ては、例えゲイン低めの設定であってもあらゆる音楽スタイルで素晴らしいサウンドを生み出すことができる柔軟性があることは事実ですが、ゲイン高めのそのサウンドは多くの著名かつ象徴的なロックアーティスト達の使用でよく知られています。ストーンズからメタリカ、ナイトレンジャー、ラムオブゴッド、そしてスティーブ・ルカサーやジョン・ペトルーシといったアーティストの使用により、MARKシリーズはポピュラーミュージックに消すことのできない"マーク"(洒落ではなく)を刻んでいます。特に、激しいMARKシリーズのリードサウンドとグライコによるミッドカットされたクランチ・リズムサウンドは、ヘビーロックの編み目に織り込まれています。

このMARK FIVE: 25においては、その３つのモードのユニークかつ互いに拮抗したサウンドは、再現され、また幾分高められています。それらはMK II+CやMK IVそしてXTREMEとラベリングされていますが、それぞれの音の方向性が分かりやすいものとなっています・・・すなわち、フォーカスされ、ウォームであり、そして危険なサウンドです。

チャンネル2のモード切替の上側のMK II C+は、アイコンとなっているMARK IIC+のLEADモードを精密に再現したもので、激しい中域と鋭いトップエンドのサウンドを、３０年経ったこのクラシックな回路から得ることができます。(少なくとも我々にとっては)ハイゲインサウンドを"ビンテージ"だと考えるのは面白いことですが、確かに８０年代にいくつかのロックバンドが彼らのサウンドを決定的なものにし、そのアーティスト達が今日も尚そうであるように、MK II C+はレコーディング・ドリームであり親友であり・・・ロックの歴史の中で生き残り、今も尚元気なアンプと言えます。その素早いアタックとタイトな中域は、特に大音量のロックやメタルのサウンドにおいて完璧なキャンバスとなり得たのですが、それと同時にもうひとつMARKシリーズのアイコンとなる機能が、フロントパネルに搭載されたBoogie 5-BANDグラフィックEQです。MK II C+モードは、グラフィックEQに対する反応がとても良く、特に有名な、究極のセッティングが"80Hz"と"240Hz"の帯域(スライダー)です。MK II C+はその中域にフォーカスをおいた特性から、グライコの設定においてタイトかつよく整った太いサウンドを得ることができます。750Hzの帯域(スライダー)は、このモードにおいては本来持っている中域のアタックを必要分引き出すのに完璧なツールであり、求める音像にあわせて中域を強調したり(カーブは山鳴り)、カットしたり(カーブは凹む)することができます。多くのヘビーロック愛好者はMK II C+モードとグライコを組み合わせて、アグレッシブなハイゲインのリズムを刻まれることでしょう。その他にも、音の輪郭を整えたり、ハイゲインかつ中域を強調することにより、オリジナルのリード・サウンドを作り上げることができます。

スイッチの真ん中の位置のMK IVモードは、MARK IVの"Lead"チャンネルを忠実に再現しているもので、6L6管仕様のMARK Vのチャンネル3と、このMARK FIVE: 25の両方で採用されています。MARK IVのLEADモードは、中域が強調された兄弟機種(MARK IIC+)より、厚くクリーミーなサウンドとなっており、単音のソロやハイゲイン設定のコード演奏に適した温かみのあるボイシングとなっています。また、よりサウンドに迫力と幅を備え、サウンドに丸みをつけたり隙間を埋めたりすることもできます。MARK II C+のサウンドをより強調する、またはフルボディのバランスの取れたサウンドにする、という両方に優れているため、グライコで極端なセッティングにする必要はないかもしれません。750Hzの帯域を極端にカットしたり、単独または同時にローエンドの80Hzと240Hzのスライダーを極端にブーストすれば、特にハイゲイン時に(MASTERコントロールの設定で)サウンドをまとめるのではなくよりグシャッと圧縮したような感じにすることができます。グライコを同時に使用する場合でもしない場合でも、MARK IVモードは色んなスタイル、ロー/ハイゲインに適し、"これがあれば"というようなLeadモードを備えた優れたものです。そのサウンドの温かみやバランス、そして演奏のしやすさは、MARK Vのチャンネル3においてサウンドの要であり、パワー部がEL84管のMARK FIVE: 25においては、よりタイトでブライトなサウンドになります。

スイッチ下側のXTREMEモードも、6L6管仕様のMARK Vからそのまま取り出した忠実なコピーです。オリジナルの名前であるEXTREMEの"E"が省略されているのはこの小さなフロントパネルに合わせたものですが、その名前の通り、溢れるような倍音を伴ったハイゲインのサウンドを生み出し、そのアタックの速さは上段のMARK II C+モードを凌ぎます。このとてつもなくレスポンスの速いボイスはピックが当たった瞬間に生み出され、アグレッシブな咆哮をあげます。対して同じようなレスポンスを持った、EL84管を搭載したMARK FIVE: 25は、アタックが素早く、中域が強調され、ボトムエンドの少し上のあたりが欠けています。XTREMEモードは、怒れる十代のように鋭く切り刻むようなサウンドを奏で、ニュアンスという意味では欠けていますが勢いのあるサウンドとなっています。

5-BAND GRAPHIC EQ

フロントパネルに装備された5-BANDグラフィックイコライザー(グライコ)は、1970年代にMARK Iが登場した当初から、MARKシリーズBoogieアンプのアイコン的なトレードマークとして存在し続けています。この機能を使用して出力コントロールすることは否定されるものではなく、特にMARK IIとMARK IVのタイトかつ中域が強調されたゲインサウンドとの組み合わせでは顕著でした。80年代は、MARK IIとIIIに装備されたクラシック"V"セッティングが、即座に定番となりました。分厚いローエンドとミッドカット・サウンドとクリスピーな倍音を伴った高音のサウンドで、MARKシリーズのアンプは今日のブリティッシュ・サウンドのもう一つの優れた選択肢となったのです。またすぐにヘビーロックにおける他のアンプのポジションを奪い、ロックの歴史においてオンボードのBoogieグライコというものを素晴らしいニッチなアイテムとして描き出したのです。

MARK FIVE: 25のトーンコントロールは正確かつ広い範囲で効果的である一方、シグナルパスの最初に位置するために、あるモードであまり設定を上げるとサウンドが不安定になることがあります。ひとつの例として、チャンネル2のBASSコントロールですが、MARK II C+モードやMARK IVモードを選択時にプリアンプ部でベースを上げすぎると、サウンドがずんぐりとしてまとまらなくなり恐れがあります。

グライコはシグナルチェーンの最後尾に位置するので、どのように特定の帯域がスピーカーキャビネット ー究極的にはあなたの耳に聞こえるかというのを意識しながら、最終的なサウンドを決定することができます。また意識するのはこの25Wのパワー部において、2つの低域ー80Hzと240Hzを極端なセッティングにしたときに出力が素早く使い切られ、ヘッドルームがそれに影響されるということです。特に、10W出力モードにおいては配慮が必要で、慎重にコントロールノブを設定し、ベストなパフォーマンスが得られるようにして下さい。ほんの少しの調節でもあきらかに音に影響しますので、是非このパワフルなツールを賢く使用して、欲しいサウンドが得られるようにしてみて下さい。また、個々のEQを設定している間に耳が麻痺してきますが、そういうときはサウンド全体に注意を払うようにしてみて下さい。

それぞれのチャンネルは、スライダーのすぐ左横に位置しているミニ・トグルスイッチに対応しており、ここでグライコの使用環境を選択します(MARK FIVE: 25では、出力を変化させるための2つの選択肢があります)。それぞれのチャンネルごとに、グライコをアクティブにするかそうでないかを選択するのですが、常にONにする場合はトグルスイッチを上側(EQ ON)にし、常にバイパスにする場合はトグルスイッチを真ん中("0")にします。フットスイッチでEQボタンをON/OFFする場合は、トグルスイッチを下側(EQ FS)にします。またスイッチの間にはオレンジ色のLEDが配置されており、EQのステータスを知らせます(場合に関わらず、点灯しているときはEQ ONです)。

MULTI-WATT™ Channel Assignable Power

グライコのスライダーの右側には、チャンネルごとにMulti-Watt™ (マルチワット)出力スイッチが配置されています。このスイッチでDyna-Watt™(ダイナワット)パワーのフル出力である25W(ダイナワット技術によって、実際の定格出力よりもパンチがあり、アタックの際のヘッドルームのバーストを感じられる)、またはより輝くようなクリップしやすいCLASS A/Bの3極管モードの10W出力のどちらかを選択できます。マルチワットスイッチの間にある青色のLEDは電源ランプです。

ダイナワットによって、ライブやスタジオでのリハーサルの際に、クリーンサウンドでは最大の音量を、ハイゲインでのバッキングではタイトなレスポンス(特にローエンド)を得ることができます。このゴムのように弾力のあるパワー部は、1984年に作り出され、その衝撃的なパフォーマンスはMESAの最初の低出力アンプであるSTUDIO 22のエンジンとして機能していました。爆発するようなダイナミックなスピードと演奏のしやすさ、またその定格出力をはるかに超えたような印象を持つその技術は、30年経った今でもMESAの低出力アンプの心臓部であり続けています。輪廻を繰り返すように、こちらもまたダイナミックかつ表現力豊かでタッチも繊細なMARKシリーズのプリアンプ部と組み合わさり、いともたやすく、魔法のような信じられない程の演奏経験をもたらします。

10W出力を選択すると、2xEL84管がCLASS A/Bの3極管モードとなり、ダイナワットとはまた違うクリップしやすい出力となります。より線の細い若干きらびやかなレスポンスと、ミニレクチで採用されているのと同じ低出力配列は色々な音楽スタイルに対応でき、またそれはMARK FIVE: 25に搭載の、6つの用途の広いプリアンプモードと完璧にフィットします。10W出力は、自宅練習やスタジオ練習またはレコーディングといったような小音量での演奏に適し、パワー部をよりゲインの源として使用することでプリアンプのGAINコントロールの設定を抑え、真空管をオーバードライブさせて歪みを得るといったオールドスクールなアプローチが可能です。

その右隣にあるPOWERスイッチで電源のON/OFFを行い、STANDBYスイッチはコールドスタートからのウォームアップまたは一旦真空管を休めるためのクールダウンに使用します。

これで、フロントパネルについての概要説明は終わりました。次は、リアパネルを見て行きましょう。

概要 : リアパネル

まずリアパネルの一番左端から見ていくと、シリーズ(直列)接続のバッファード・チューブ・エフェクト(FX)ループが配置されています。これは外部エフェクト・プロセッサーを接続するポイントであり、プリアンプとパワーアンプ部の間の接続部分となります。エフェクトループにはラックまたはペダルタイプのエフェクターを接続できますが、フロントパネルのインプットに接続したほうが良い効果をもたらすエフェクターも存在します(ワウやコンプレッサー、ゲイン/オーバードライブペダル、エンベロープ・フィルター等)。またバッファーされているため複数のユニットを直列に接続することができますが、信号劣化を防ぐため、あまり長いシールドケーブルを使用しないようにご注意ください(例えば7.5mを超えるような長さのものを使用する場合は、追加のバッファーやラインドライバーを使用して音質を保ちます)。言うまでもないことですが、MARK FIVE: 25はその小さなサイズにも関わらずプロ仕様のアンプです。音質を損なわないためにも、エフェクトループに接続するエフェクト・プロセッサーは高品質のプロフェッショナルレベルのものを使用することをお勧めいたします。

ヘッドホン

MARK FIVE: 25にはヘッドホンジャックが装備されており、スピーカーを接続できないような場合でも個人的にアンプのサウンドを楽しむことができます。このジャックからは、MARK FIVE: 25に同じく搭載されているCAB CLONE™ D.I.から"スピーカー・シミュレーター"の信号が得られますので、驚くような素晴らしいサウンドとフィーリングが出力されます。お伝えしておきたいのは、ヘッドホン自体のパフォーマンスと耳への聞こえ方は、お好みのスピーカーキャビネットとは大きく違うということです。そのために大事なこととして、ヘッドホンの品質に合わせてアンプのセッティングを調節し、より良い結果を得るということです。演奏時の音量は、MASTERコントロールによって決定されますので、(回路がパッシブでありオペアンプ等が音量を設定するのに使用されていないことを理解した上で)MASTERコントロールで音量を調節するということです。ヘッドホンは音や効率の両面で異なるため、ヘッドホンジャックのパフォーマンスはより最適化されるか、または接続されるヘッドホンに妥協点を見出さなければならないでしょう。ヘッドホンを決めてしまう前にいくつかタイプやメーカーの異なるセットを試すことをお勧めいたします。

オールチューブ・スプリングリバーブ

REVERB(リバーブ)コントロールについてですが、それぞれのチャンネルに独立してMIXコントロールが装備されています。これにより、それぞれ異なる量のオールチューブ・ショートスプリング・アナログリバーブをMARK FIVE: 25の2つのチャンネルそれぞれに効かせること_が可能です。ほんの少しのアンビエントリバーブからフルウェットなリバーブまで、テイストや音楽スタイルに合わせてコントロールすることができ、この伝統的なアナログのスプリングリバーブを搭載することで、MARKアンプとしてのプロフェッショナルな正当性を更に強調しています。MARK FIVE: 25のスピーカーのインターフェースは、6L6管のMARK Vからそのまま引き継がれており、1 x 8Ωジャックと、2 x 4Ωジャックのスピーカーアウトを備えています。この組み合わせなら正確なインピーダンスのマッチングがあらゆるスピーカーキャビネットとその負荷インピーダンスに対応可能であり、どのようなスピーカーを選んでも素晴らしいパフォーマンスを発揮します。

スピーカーアウト

MARK FIVE: 25は、6L6管仕様のMARK FIVEヘッドからそのまま引き継いだ8Ω x 1と4Ω x 2のスピーカーアウトジャックを装備しています。この組み合わせは、広い範囲のスピーカーキャビネットのチョイスと負荷インピーダンスに対応できますので、どのようなスピーカーを選んでも素晴らしいパフォーマンスを発揮できます。

CAB CLONE™ D.I.について

最後に、MESA製品のリアパネルにおいて今までで最もクールな装備が、今回採用されたCAB CLONE D.I./スピーカーシミュレーター機能でしょう。このビルトインされた魔法の機能は、MARK FIVE: 25の素晴らしいサウンドやフィーリングをとらえて、ダイレクトにレコーディングコンソールやレコーダーに、スピーカーにマイキングすることなく送り込めるのです。

既に高い評価を得ている単独のCAB CLONE™からそのまま引き継がれた、ライン出力に最適化されたD.I.機能(とヘッドホンアウト)は、スピーカーアウトからの信号を捉えて、ダイレクトに信号に変換するという素晴らしい仕事を行います。ここに4つの要素があるのですが、例えばスピーカーを同時に使うか使わないかを選択出来るので、必要に応じてダイレクト信号とマイキングしたスピーカーからの信号をミックスできるのです。CAB CLONEのセクションでは、スピーカーのステータスを切り替えるスイッチ(ON/OFF)と、スピーカーキャビネットのスタイルを切り替えるスイッチ(CLOSED BACK クローズドバック / OPEN BACKオープンバック)の他に、GROUND(グラウンド)スイッチ(GROUND/LIFT：Pin1が切り離される)とXLRバランスアウトを装備しています。このコントロール群の配列は、おそらく最も効果的でどのMESAアンプにも搭載されるべき機能で成り立っており、多くのポテンシャルを持っています。MARK FIVE: 25は、我々のアンプの中でも一番最初にこのパワフルなツールを装備したものとなりましたが、信頼性やトーンを犠牲にすることなく、ライブユースまたはレコーディングにおいてスピーディーにかつ便利に使用できるものとなっています。それは間違いなくこの小さなダイナモのプロユースなポテンシャルを高め、MESAの新しい時代の先駆けのアンプとして、そのカテゴリーのアンプの基準を引き上げるとともにより高みに君臨することでしょう。

ここまで、MARK FIVE: 25の各機能やコントロールについて全体的に見てきましたが、それらの操作がどのように音に作用し、欲しいサウンドが得られるかについて詳しく見て行きましょう。

演奏を開始するには

1. 付属の電源コードをリアパネルの電源コネクタに接続します。

2. 使用するスピーカーキャビネットを、リアパネルの右側に配置されたスピーカーアウト(インピーダンスがマッチしているジャック)に接続します。フル出力(ワット)とベストのトーンバランスが得られるよう、最初は8Ωジャックの使用をお勧めします。

3. フロントパネルの一番左端に配置されたインプットジャックに、なるべく短めの楽器用シールドケーブルを使って楽器を接続します(ケーブルが長いとハイが落ち、ノイズを拾いやすくなります)。

4. 付属のMARK FIVE: 25用フットスイッチを、フロントパネル左端下側のジャックに(付属の)ステレオケーブルで接続します。また両チャンネル間にある、3ポジションのFSミニトグルスイッチを"FS"(真ん中の位置)に設定してフットスイッチが各チャンネルに作用するようにします。フットスイッチを使用しないまたは持っていない場合は、トグルスイッチの操作で2チャンネルのうちどちらかを選択できます。

注意: 付属のフットスイッチでチャンネル選択をする場合は、FSミニトグルスイッチの設定は真ん中の"FS"の位置にして下さい。

5. STANDBY(スタンバイ)スイッチがスタンバイの位置(左側)になっていることを確認しながら、フロントパネル右側のPOWER(電源)スイッチをONの位置にして最低30秒間待機します(真空管を高電圧で使用するためのウォーミングアップが目的です)。

注意: 真空管をより長くお使い頂く為に、コールドスタート時は毎回この手順に従って下さい。

6. エフェクトループを使用する場合は、使用機器をMARK FIVE: 25に実際に接続する前にこの取扱説明書のエフェクトループの項をよくお読みになり、正しい接続方法や操作について理解するようにして下さい。

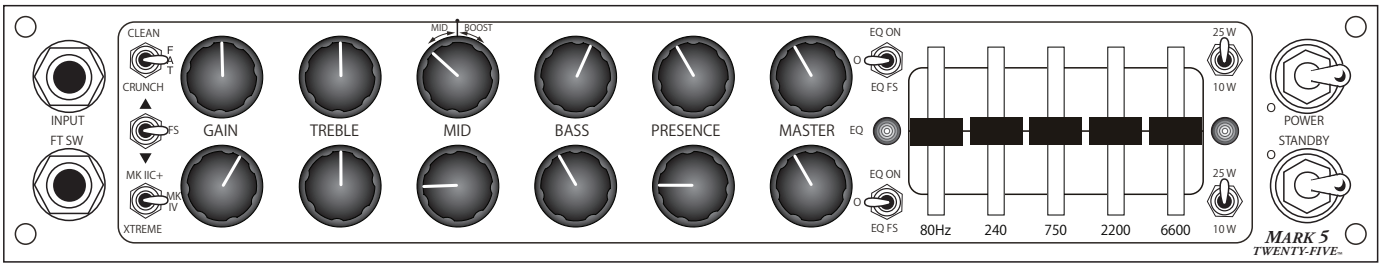
7. 以下のサンプルセッティングを参考に、それぞれのコントロールをこれらに近いセッティングにして、トーンの新しい世界を開いてみて下さい。覚えておいて頂きたいのは、これは数多の可能性の中のほんの一つのセッティング例に過ぎず、あなたのお好きなように調整してみて下さい。

8. STANDBYスイッチをONの位置(右側)にします。あとは演奏を楽しんで下さい!

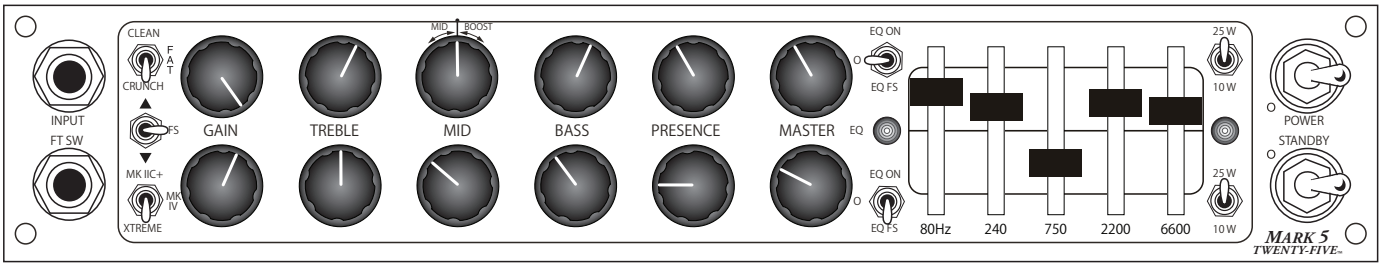
サンプルセッティング

以下に、いくつかのセッティング例を図示しています。もちろんこの取扱説明書をお読みになれば幾通りものセッティングが可能なことはお分かりになると思いますので、セッティングに悩まずに、すぐ演奏を開始したい場合の参考にして下さい。

Mark Clean/Mark IV Lead



80’s Crunch/XTREME Lead (EQ Optional)



役立つヒント

注意：重複する情報について：この取扱説明書を読み進めていくと、重複する情報やセクションが出てくると思いますが、これは読む人への注意喚起のために繰り返されており、興味のあるセクションしか読まない人に注意を向けてもらうことができ、またMARK FIVE:25について知っておかなければならない重要なポイントを繰り返している場合もあります。最初から最後まで漏らさず読む人(大抵のMARKシリーズの熱狂的なファンの方はそうです)には申し訳ないとは思いますが、将来この取扱説明書のある部分を参照する際に有効になると思います。

・もしPOWERやSTANDBYスイッチ、またはGAINやMASTERのノブ(エフェクトループのインプット/アウトプットボリュームも同様です)がONになっているまたは設定が上がっているのに音が出ない場合は、リアパネルの一番右側のCabClone™のSPKRのON/OFFスイッチがON側になっているかチェックして下さい(運搬中やセットアップの途中等で、ON/OFFが切り替わることがあります)。

・立って演奏するときは、同じ床に少なくとも一つのスピーカーキャビネットを設置したほうがサウンドがより良く聴こえる/感じるかも知れません。アンプ(またはスピーカー)を床に置くと、エフェクトを同時に使用する場合や、特に低域を伝達する際にサウンドが太くなり、また弦の感触をしっかり感じ取れます。ステージのような木の床だと本当に素晴らしいので是非試してみて下さい・・・ギターというのは面白い楽器で、二日続けて同じサウンドに聞こえるということがあまり無く、毎夜、また演奏する場所によって異なるように感じますので、あらゆるメリットは活かすべきです。この"カップリング"エフェクトはどんなときも役立ちますが、一つ例外を挙げるならステージ上にたくさんのマイクが設置されているときです。そのような場合は、カップリングエフェクトまたは共鳴したフィードバックを最小限にするためにアンプをステージから高く設定する必要があるでしょう。

・覚えておいて頂きたいのは、MARK FIVE: 25はいかなる点においてもハイパフォーマンスなアンプであるということです。よくチューンされた車のように、そのサウンドを楽しむために迷う必要はなく、単純に全てのコントロールを中ぐらいの位置にセットするだけで驚異的なパフォーマンスを得ることが出来るのです。確かに時には全速力で駆け抜けたいときもあるでしょうが、車であればそのためには特別なタイヤが必要です。アンプでいうなら、それはハムノイズの無い安定したプリアンプ・チューブのセットです。

・電源をONにするときや演奏を中断するとき等、数分以上演奏をしないときはSTANDBYスイッチを使うようにします。それによって真空管の寿命が長くなります。

・フットスイッチでチャンネル選択を行う際は、フロントパネルにあるチャンネル・セレクトのミニ・トグルスイッチ(フロントパネル左端の二つのモードスイッチの間にある)を真ん中のFSの位置にセットします。

・各チャンネルにあるGAINとTREBLEコントロールは、最もよく効くトーン・シェイピングコントロールであるため、調節の際は注意が必要です。またそれらはすべてのモードにおいて、アタックの性格やサウンドの方向性のほとんどを決定します。全てのチャンネルで聞ける優れたサウンドの多くは、これら二つのコントロールが中域にあるときに生まれます。GAINが高めに設定されているときは、金属的な真空管のノイズを起こさないようにTREBLEの設定をあまり高く(2時以上)上げないようにして下さい。

・チャンネル1のMIDコントロールの通常の設定域は、0～5.0ぐらいにするのがより濃密なテーパーとなります。5.0以上にするとブーストが働き中域のゲインが加わり、トーンコントロールの効果が減少します。

・GAINを高めに設定する際は、5-BANDグライコを使用してシグナルチェーンの最後で高域を加えるようにすれば、多くの場合プリ管へのストレスが小さくなります。

・5-BANDグライコを使用する場合は、サウンドに対してどのような方向性にしたいかをクリアにするために、フラット(EQが効いてない状態)に戻してみることをお勧めします。"もっと、もっと"と思っていると、簡単に欲しいサウンドを見失ってしまい、全てのEQの設定を一番上にしてしまいがちです。EQトグルスイッチまたはフットスイッチを使ってフラットな設定に戻してみて、このようなよくある落とし穴に陥らないようにして下さい。

・PRESENCEは、チャンネル1または2のどちらにおいても、トーンを形成する際に、ゲイン高めの設定だと非常によく効きます。PRESENCEが低めの設定ではサウンドは太くコンプレッサーがかかった、ボーカルのようなサウンドになります。PRESENCEが高めだとサウンドが開放されて、あらゆる倍音が流れ出ます。プリアンプをお好みのセッティングに調整した後で、オーバードライブのかかったバッキングやリードサウンドをPRESENCEを使って微調整して下さい。

・チャンネル2の他のモードに比べて、XTREMEモードでは音量が大きくなるように感じますが、それは通常であり、負のフィードバックが減少してパワーセクションの感度が増した結果そうなります。

・チャンネル2でBASSコントロールを(特にGAIN高めの際に)あまり高く設定しないように注意して下さい。過度にBASSコントロールを上げると、アタックがぼやけてレスポンスが遅くなります。基本的なルールとしては、GAINを上げるときはBASSの設定を下げて下さい。

・チャンネル1のFATモードを使用するときは、EQスライダーが過度にならないように注意して下さい。特に80Hzと240Hzのところは、ミックスの中に過度な低音を作ってしまうので注意が必要です。またこのモードでハイゲインセッティングにすると、サウンドを損なったり、大音量で演奏したときなどに低出力のスピーカーにダメージを与えてしまうこともあります。

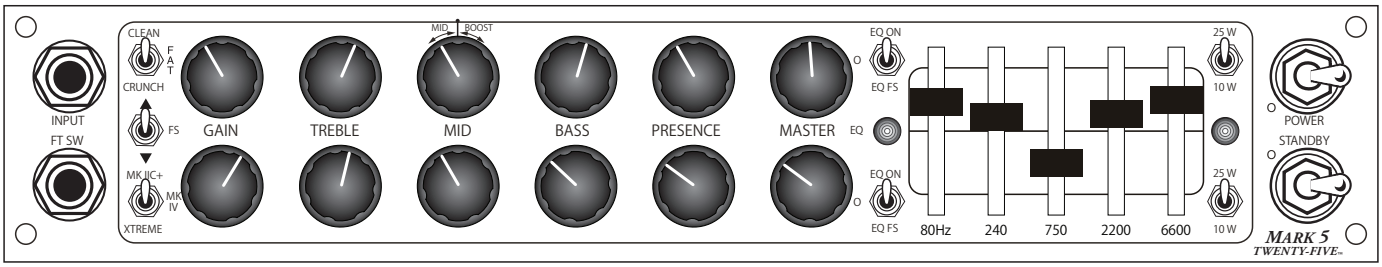
・MARK FIVE: 25のパワーセクションは二つのモードで切り替えられるため、スピーカーの抵抗値はサウンドに影響を及ぼします。大体においてサウンド的にもパフォーマンス的にもバランスのとれている、8Ωスピーカーアウトに8Ω負荷のスピーカーをマッチさせることをお勧めします。4Ω負荷でも演奏可能ですが、通常サウンドが少し"ソフト"になり、中域のパンチがより失われてしまうでしょう。

・異なる負荷のマッチングを試す安全な方法としては、例えば8ΩのスピーカーをMARK FIVE:25の4Ωスピーカーアウトに接続したり、16Ωのスピーカーを8Ωスピーカーアウトに接続するといった方法があります。この方法であればアンプにダメージを与えることなく技術的なミスマッチを起こし、お好みに応じてユニークなレスポンスを得ることが出来ます。ミスマッチを行う際の唯一のペナルティーとしては、パワー管の寿命が少し短くなることであり、アンプの最大限のヘッドルームが得られなくなります(フルパワー出力)。また、例えば2Ω負荷を4Ωのスピーカーアウトに接続するといったような低いほうでのミスマッチは行わないで下さい。出力トランスに強い負荷がかかり、アンプにダメージを与えてしまうことがあります。

・MARK FIVE: 25は低出力のアンプなので、もう少しパワー(またはオーバードライブ)があれば、というように感じるかも知れませんが、50Wや100Wのアンプを使用するのではなく、MARK FIVE:25の各チャンネルのプリアンプのGAINを普段よりも少し低くした設定を試してみて下さい。こうすることによってサウンドによりアタックと基本となるパンチが得られ、またタイトかつ濃いサウンドになります。このアンプは巨大なプリアンプゲインを秘めていますので、ベストなサウンドとパフォーマンスを得るのにいつでも高い設定が必要ということもありません。

・フロントパネルの機能を全て確認したら、次はリアパネルの中央部分にあるREVERB(リバーブ)コントロールをチェックして下さい。フロントパネル側から見て左側がチャンネル1のREVERBミックス(コントロールノブ)、右側がチャンネル2用となります。

フロントパネル(コントロールと機能)



各チャンネルについて:モードごとの説明

本機の各チャンネルは極めて対応能力が高いため、どちらかをリズムバッキング用またはリード演奏用とカテゴライズの必要がありません。多くのプレイヤーは最初はチャンネル1をクリーンサウンド、チャンネル2をオーバードライブのかかったコードプレイや単音でのソロ演奏に使用するでしょう。この方法に特に問題はなく、実際各チャンネルはこのアプローチに上手く対応出来るようになっており、それぞれのチャンネルごとに3つのサウンドが得られるように設計されています。どんなものかというと、チャンネル1では素晴らしいクランチリズムサウンドとオーバードライブのかかったリードサウンド、チャンネル2ではスレッショルドがクリップした素晴らしいローゲインのサウンドを生み出します。ですので各チャンネルはサウンドスタイルに縛られるものではなく、それぞれ独自のゲイン構造を持っているとお考え下さい(ゲインが低いか、高いかです)。そう考えると、欲しいサウンドを探す時に思考を制限することなく、必要に応じてチャンネルを選択しイマジネーションを広げられます。実際本機は2チャンネルで全てのゲイン幅と出力をカバーされ、表現に制限を持たない楽器として設計されており、プレイヤーをトーンの世界のどこにもで連れていくことが出来ます。

以下は各チャンネルの短めの参考ガイドで、ゲイン構造がどのようにレイアウトされているかや、また欲しいサウンドを得るためにどのようにアプローチするかについて説明されています・・・お楽しみの始まりです。

チャンネル1:

このチャンネルは本機の二つのチャンネルの内のゲインが低いほうになります。CLEAN(スイッチ上側)とFAT(スイッチ真ん中)の二つのモードは、より低いゲインのクリーンサウンドを生み出し、役割の中心となっています。またそれら二つは名前が示す通り、CLEAN(クリーン)が甘く弾けるような美しいローゲインサウンド、FAT(ファット)はそこに大きな低域と息吹がサウンドに加わります。これら二つのモードには巨大なヘッドルームとダイナミックレンジ、そしてインプットステージ(入力段)・センシティビティを備えており、可能な限り圧縮を抑えた、早いアタックの性格を持っています。また、それらの性質は"ビンテージ"な構造をベースにされています。

中ぐらいのゲインを持ったCRUNCH(クランチ)モード(スイッチ下側)は、プッシュされ、オーバードライブがかかったクランチリズムサウンドを生み出し、チャンネル1の最大ゲイン設定と、チャンネル2のハイゲイン構造に切り替わるポイントの間の橋渡しの領域となります。この特別音楽的な"中間の"モードをチャンネル1のサウンドパレットに組み込むことは技術的に簡単ではありませんでしたが、シームレスなレスポンスとフィーリングを得られるという意味では、非常に重要な共通のサウンドコントロールとなります。CRUNCHは他のアンプでも唯一のモードであり、チャンネル1において優れたサウンドの宝庫として限りない多様性を誇っています。

またCRUNCHモードはローミッド(低・中域)のゲインとサウンドの厚みを増加させるため、クリップしたときによりスムーズなサウンドを生み出します。また加わったゲインがアタックを少し遅らせますが、反面サステインと迫力をサウンドに与えます。バランスの取れたダイナミックなサウンドは、コード分解フレーズや速いパッセージのソロ演奏のどちらにおいても、同じように良く機能します。この中ぐらいのゲインとダイナミックレンジは、最大設定のオーバードライブサウンドを生み出す"ビンテージ"のゲイン構造と、信号を十分に飽和させたチューブステージが追加されたチャンネル2のようなハイゲインアンプの完全なる(中間)移行部分であり、アタックを遅らせ、よりサウンドにコンプレッション(圧縮)感が加わります。CRUNCHモードは、今までにあった伝統的なゲイン構造によるゲイン/オーバードライブサウンドの熱烈な愛好者の全てとも言えます。

繰り返しますが、チャンネル1の3つ全てのモードは、あなた方がより高出力なアンプで慣れているよりもパワー部のドライブや歪みがより増して聞こえるかもしれません。それは、プレイヤーが高出力なアンプで慣れているサウンドやアタックの性格を、プリアンプのGAINコントロールのより保守的な方法で得られている証明と言えます。このことを頭に入れて、チャンネル1の3つのモードを操作して下さい。

チャンネル2：

このチャンネルは、本機においてゲインがより高いほうのチャンネルであり、MESAの伝説的なMARK II-C+やMARK IVといったアンプのベストな歪みサウンドを生み出せるようになっています。ハイゲインサウンドを狙ったすべてのチャンネルにおいて、多くの表現豊かでダイナミックなローゲインサウンドもまた、GAINコントロールを低め(１１時より下)に設定することで得られます。繰り返しますが、このチャンネルはスタイル等には縛られず、ゲインが低めでも高めでも、コード弾きでも単音での演奏でも問題がないように極めて柔軟性を持った設計となっています。

重要です！　思い出して頂きたいのは、チャンネル１のサウンドは高出力アンプよりも歪みや音量がよりパワフルに聞こえることがあるということです。両方のチャンネルのGAINコントロールを設定するときは、そのことを頭に入れておいてください(特に、チャンネル２です)。GAINを上げすぎてしまって、アタックがソフトに、全てがぐちゃぐちゃになってしまいがちです。もう一度思い出して欲しいのが、これは低出力アンプだということです。搭載されている小さなEL84管をどうかそのまま機能させてあげてください！　これらの真空管のクリップは美しく、８ソケットの大きなものよりもローエンドが膨らまず、よりハイ・ミッドに迫力があってトップまで倍音のレイヤーが美しいのが特徴です。それらEL84管がゲイン構造の大きな部分を占めていますので、GAINコントロールを操作する際はあまり無理させないほうが良いでしょう。そのほうがサウンドがタイトかつクリアになり、よりダイナミックなレスポンスが得られます。

MARK II C+モード　は、読んで字の如くです。このモードは、伝説的な回路のLEADモードをプリアンプ部において細部まで忠実に再現したものです。激しく密度の濃いゲインと爆発するようなアタックが倍音を変形させ、30年経った今でもソウルフルなシグネイチャーサウンドであり、多くのロックスタイルの中でも最前線に位置しています。このサウンドでフォーカスされているタイトな中域のパンチは、さらにグラフィックイコライザー(グライコ)によって色付けが可能なキャンバスを広げ、クラシック"V"セッティングは、よりヘビーなスタイルのためのMARK II-Cのハイゲインサウンドの主要な要素となっています。

MK IVモード　は、MARK IVのLEADチャンネルを忠実に再現したものです。このチャンネルの設定は広大な選択肢があり、またMARK II C+モードがよりブライトなサウンドを広い範囲でカバーしているため、我々はこのMK IVモードを少しウォームかつクリーミーなサウンドに設定しました。またMK IVモードは中域のゲインをかなり増加させ、高次倍音がロールオフしている印象を作り出しているため、結果として巨大でワイドなサウンドとなっています。概要で述べているように、このモードはずっと使い続けていられるような、"ゲインモードでこれ一つさえあれば"といったもので、バランスが取れ、温かみがブレンドされた、フルでリッチなサウンドキャラクターのため演奏がしやすいものになっています。また5-BANDグライコとの相性も極めて良く、GAINコントロールを低めに設定すれば非常に素晴らしいサウンドとなり、MARK II C+モードのパーカッシブなサウンドよりも若干スムーズです。

XTREMEモード　もその名の如く、エクストリーム(過激)！です。前に述べたように、この小さなフロントパネルに合わせてオリジナルの名前であるEXTREMEの"E"が省略されていますが、間違いなくMARK IVやMARK Vが作り上げた名声に完全にこたえるものであり、更なる倍音で満たされた極端なゲインを持ち、上段のMARK II C+モードやMK IVモードよりも更に急激なアタックの速さを持っています。またこのモードは、オリジナルはMARK IVのLEADチャンネルの構造でありながら、チャンネル２のMK IVモードとほとんど反対のボイシングとなっています。過激で攻撃的、タイトで高速というのがサウンドの特徴で、本機の６つのモードの中で最もゲインが高く音量が大きくなっています。チャンネル２の他のモードからXTREMEモードに切り替えると音量が大きくなったと実感すると思いますが、我々はトーンに影響を及ぼすことがないように内部で調整を行っています。痛烈なインパクトと一瞬のダイナミクスを持ったサウンドが欲しいときは、このモードを選択して下さい。XTREMEモードは、最大のゲインと電光石火の素早いアタックが時代の流行であるようなとき、ヘビーな音楽スタイルに最もふさわしいと言えますが、瞬間のアタックやブライトなサウンドキャラクターが求められる場合も、GAINコントロールを低めに設定すれば対応出来ます。驚くことに、XTREMEモードはその倍音構成と即時のダイナミクスを持っているという性質から、"ほとんどクリーン"のサウンドを作るときに最もポテンシャルがある、という点もいくつか持っています。

注意：XTREMEモードにおいてパワー部の感度を上げると、ネガティブ・フィードバックが少ないというこのモードの特徴によってパワーアンプとドライバーがより耳につくため、少しバックグラウンドノイズが大きくなります。これは通常であり、心配することはありません。

各モードについて：チャンネル1

CLEAN(クリーン)モード

前に述べたように、このモードは本機において一番ゲインが低く、クリーンサウンドでのバッキングやソロ演奏または少しドライブさせたコード演奏等、ほとんど裸のようなブライトなサウンドが必要な場合すべてをカバーしています。本機の2つのチャンネルのそれぞれのモードと同様、まずよりスリムでタイトなサウンドのCLEANモード、より迫力とスケールを増したFATモード、そしてよりハイゲインで中域が歪んだ設計のCRUNCHモード...それは究極の"クロスオーバー"モードで、ビンテージ設計のCLEANとFATと、チャンネル2のモダンなゲイン回路の間の橋渡し的役割を担っています。繰り返しますが、伝統的なCLEANモードと、この"中間サウンドを持った"CRUNCHモードをチャンネル1の同じ段に組み込むことは技術的に簡単ではなく、シームレスなレスポンスとフィーリングを得られるという意味で非常に重要なコントロールです。これら3つのモードは、どれも多くのブティックアンプでは唯一のモードとして搭載されている誇るべきものですが、あなたはこの3つすべてを、MARKシリーズにおいて最も小さい本機にて手に入れることが出来るのです。

CLEANモードは、MARKシリーズのCLEANサウンドがブレンドされ、最も素晴らしく完成されたMARK IVのクリーンサウンドがオリジナルで、音のミックスの中で特定の場所にギターをフィーチャーするアンサンブル環境にある場合、リズムを刻むのに最適です。また時間領域が極めて正確で、タイトなローエンドと瞬発力のある輝くようなトップエンドのバランスが究極的です。その他、10W出力モードでクリップさせると、とてもバランスのとれたタイトでレスポンスの良いサウンドになります。

CLEANモードは、タイトなクリーンバッキングや単音でのソロ演奏に重点が置かれています。このモードは本機のどのモードよりもヘッドルームが広いのですが、極端なセッティング(4時～5時半)でクリップさせてプッシュすることも可能です。それでも、よくそのような使い方をするFATモードのそれよりもサウンドがタイトです。このタイトさの良い点は、FATモードでクリップさせるときよりも、時にBASSコントロールを高めに設定することが出来ます。その理由は、CLEANの全体的な方向性が準低域をむき出しにして、それによってアグレッシブなスレッショルドのリズムサウンドを求める場合にそれを試すことが出来るからです。

実際CLEANモードはアグレッシブで激しくクリップしたコードサウンドにも非常に有効で、特に出力選択スイッチで10Wモードを選択し、PRESENCEコントロールが少し高め(1時～2時半)に設定されているときにそれが顕著です。ほとんどクリーンなサウンドで素早いプレイが求められるような、パンクやクラシックロックの高速のバッキングを志向するプレイヤーは是非このセッティングを試してみて下さい。

CLEANモードのサウンドは、その透明感のあるトップエンドの輝きや素早いアタック、そして高次倍音のオープンさが、コード演奏や単音のアルペジオで輝きを放ちます。ローエンドもふくよかにはなりますが、それほど低域過ぎないため、グルーヴが正確かつリズミックな演奏を必要とする際にも大きすぎず、また邪魔になることもありません。CLEANモードは、ファンクのバッキングや燃えるようなカントリーピッキングにも素晴らしいサウンドで応えます。

CLEANモードの中域は、FATモードと比較すると音域的に若干高く、それがCLEANモード時のサウンドにパーカッシブなアタックを与え、ミックスの中でタイトさをキープし、その音域の中で自身の領域を守るような最大のインパクトを持てるのです。この高めの中域で演奏をするということはパワフルな方法であり、CLEANモードのサウンドを前へ押し出す - それは時間領域的にもアタックが素早いということですが、または遅く感じるぐらいにゆったりとリラックスした感じもサウンドに加味することが出来るといった役割もあります。BASSやMIDコントロールと併せて試し、アタックやサウンドの幅そして迫力の微調整の仕方を学んで、あなたが最も演奏したいスタイルやテンポに合わせて実験してみて下さい。

FAT(ファット)モード

FATモードは、CLEANと著しく対照をなしており、大きく弾んだボトムエンドは準低域まで及んでいます(搭載されているEL84管が出来る可能な限り)。これが全体的な領域に"エアー"感を与えるのですが、特にボトムとトップエンドが膨らみ、広がります。このサウンドは、オリジナルのMARK Iのインプット2の設計にかなり依存したものです。FATモードはコード演奏やクリーンサウンドでの単音ソロ演奏にも大きさでも勝っており、また10W出力モードでのクリップサウンドも最高です(BASSコントロールは低めに設定して下さい)。

FATモードは全ての面において、タイトでブライトなCLEANモードと反対です。この回路はレオ・フェンダーが開発した初期の60's Black Faceへのオマージュであり、そのクラッシックなトーンはクラシックロックやブルースのサウンドの構成要素の一部となっています。甘くキラキラとした高域は天使が舞い上がるようであり、またベルのように響く低域はバンドの音の中でも存在感を十分に放ちます。またパンチがあってタイトな素晴らしい中域は、十分にローが出ていて迫力があります。大きく、エアー感のあるローは全ての中心であり、その小さなパワー管が生み出す可能な限り大きなベースとなっています。これらの品質が生み出すのは演奏のしやすさであり、ベストかつ魂のこもった演奏をあなたから引き出します。

FATモードはまた、コード演奏やバッキングにも適していますが、CLEANモードと違うのは、巨大で瑞々しいサウンドでミックスを埋め、全ての楽器の周囲が豊かな倍音で包まれるということです。またよりワイドな音になり、何らかのプロセスを得ずとも歌のバックボーンとなります。

FATモードのゲイン構造はテーパー(先細)のため、ゲインをより低く設定したスレッショルドやクリップサウンドにより向いています。FATモードでクリップするまでプッシュすると、プリアンプのより大きなカソード(陰極)値がスムーズでリッチなブレイクアップを生み、コード演奏にもブルージーな単音ソロにもマッチします。この更なるゲインの低下がコードの荒削りなエッジを埋めて、かつ迫力が加わるのです。この音のクオリティが多くのプレイヤーにFATモードを選択させ、とげとげした部分の無いマイルドなオーバードライブサウンドを求めるのです。FATモードはまた、スタジオ等でもクリーンと少しオーバードライブしたサウンド共に非常に有効であり、より大きい音量でもダイナミクスのニュアンスはしっかり残ります。実際に出力切り替えスイッチで25Wを選択したときでも、増加されたヘッドルームによってそのダイナミクスの違いをたやすく表現することが出来ます。

一つ覚えておいて頂きたい重要なことは低域を真ん中より低めに設定することであり、例えばBASSとMIDコントロールをより高めの設定(１１時以上)にすると、いともたやすくプリアンプとスピーカーの両方に過負荷が掛かるということです。パワー部は更なる低域が素早くパワーを使い尽くすためそのどちらの影響も受けず(低域を増幅するのにはより出力が必要なのです)早すぎるクリップと同調し、あまり喜ばしくないすんぐりしたぼやけたサウンドとなってしまうのです。この取扱説明書の役立つヒントの最初のほうに書いてあったシンプルなルールに従うとすれば、GAINコントロールを上げるときは、BASS(とこの場合はMIDも)を下げたほうが良いです。こうすれば機材がオーバーロードすることなく、またサウンドがずんぐりすることを防げます。。

注意：FATモードによって形成される低域は、BASSやMIDコントロールがあまり高すぎたり、特に同時にGAINが高い設定になっていると、ボトムがヘビーであまり良くないサウンドを生み出すこともあり、スピーカーに負荷を掛け、またヘッドルームも使い尽くしてしまいます。常識的、かつそれがお勧めでもあるのですが、FATモードでGAINの設定を上げる際は、BASS(とMIDも)を低め(１０時～７時半またはOFF)のセッティングにします。

CRUNCH(クランチ)モード

このモードはMARK Vからそのまま取られたものであり、ここに完全なる"クロスオーバーモード"を形成します。迫力と周波数バランスの取れたサウンドをCRUNCHモードは生み出し、性急さとダイナミクスを持ちながら、ウォームでリッチかつヘビーなバッキングを刻むことのできるクリップ手前の領域もカバーしています。この点はCRUNCHモードをこのアンプでも最も柔軟性のあるモードにしているところで、またその名前にもかかわらず、コード演奏にもバッキングにも単音でのリード演奏にも等しく使えるサウンドとなっています。

TREBLEコントロールを上げても、サウンドがブライトになり過ぎないことがお分かりになるかと思います。この領域はトップエンドにゲインを加えますが、ブライト過ぎる場合はPRESENCEコントロールを下げることで非常に良い具合にブレンドすることが出来ます。反対に、CRUNCHモードでBASSコントロールを下げると音のタイトさが増し、全体的なキャラクターが温かく、本来のローエンドの豊かさもキープすることが出来ます。

またCRUNCHモードは、GAINコントロールが常識的な範囲に設定されていれば、出力選択スイッチと併せて素晴らしいコンビネーションを得ることが出来ます。再度になりますが、EL84管にパワー部で少しゲインを加えさせ、プリアンプのGAINコントロールは下げてプリアンプとパワー部の両方が持つ厚みのあるサウンドを表出させます。またこの使い方をする場合、10Wモードで素晴らしいサウンドを得ることも出来ます。またこのサウンドはコード演奏にも単音でのプレイにも使えます。

各モードについて：チャンネル2

本機のチャンネル2は、MARK Vのチャンネル3からそのまま取られており、MARKシリーズでチャンネル選択ができるモデル全てに対してのトリビュートであり、またその設計の頂点に位置する3つの回路を搭載しています。その最も引っ張りだこの2つは、MARK II C+とMARK IVで、これらのモードのコレクションの開始点でもあり、また究極の参考案件とも言えます。この2つのアンプは長くそして著名な使用アーティストのリストを共有していて、これまで録音されたハイゲインギターサウンドのアイコンとしてどちらも存在します。チャンネル2はII C+のLEADチャンネルと、もう2つはMARK IVのLEAD、そしてEXTREME(エクストリーム)LEADとなります。これらは本当に我々の４５年に渡るスーパーチューニング・ハイゲインチューブアンプの集大成です。我々がこれまでにオープンにしてきたコツや隠された秘密、そしてハッピーなアクシデント等は、すべてこの究極のMARKサウンドを築き上げるためのものなのです。

チャンネルの項から繰り返し述べていますが、ここは2チャンネルの本機の中でも一番ハイゲインな部分であり、LEADチャンネルであると多くの人に考えられがちですが、実際プレイヤーが使用する場合は、その柔軟なサウンドを得るのにたくさんの方法があるのです。トレードマークである中域がフォーカスされたゲインサウンドは、コードバッキングにも単音のソロでも等しく有効ですが、それは音のメリハリや追従性のあるレスポンス、そして瑞々しい倍音の重なりがもたらすものなのです。これらの回路はまたゲインの大きさ次第で素晴らしいサウンドを生み出し、優れたスレッショルド・クリップサウンドやプッシュされたサウンド、そしてクリーンサウンドは、GAINコントロールがローエンドの設定で、とんがった爆発するようなリードサウンドがハイエンドで聞こえます。それらの領域の間ですべてのレンジが早急でタイト、そしてクランチ・リズムサウンドが生み出されます。この素晴らしいゲインとクリーンの定義がチャンネル2をチャンネル1と同様柔軟なものにし、あなたはこのパワフルなチャンネル・モードでどうやったらうまく欲しいサウンドが出せるか、何時間も演奏を楽しむことでしょう。

MK IIC+ モード

このモードは、８０年代半ば当時に多くの有名アーティストたちに使用されていた、2チャンネルのMARKシリーズのLEADモードの回路を復刻したものです。今日ではハードコアなファン達がこのビンテージのII-C+を追い求め、見つけたとしても当時の値段の3、4倍の値が付いています。それでも多くのアーティストは値段に関係なく、彼らのテクニシャンにそれらのアンプを見つけたら購入しておいて欲しいという注文を出しているのです。彼らは貴重なビンテージな機材から放たれるそのトーンと本物の凄みを売り込み(はい、嬉しくそして光栄です)-まるでビンテージギターのように- いつもそんな具合です。しかし安心して下さい、あなたは今(プリアンプ的に)回路の最後の部分にあるMARK II-C+を所有し、本機においてはEL84管によって出力されるのですが、基本のキャラクターは失われません。また更に良いことには、オリジナルのMARK II-C+と同じコントロールレイアウトが採用されているため、クリーンもリードサウンドも妥協する必要がありません！

II-C+のトレードマークのサウンドは、性急で剥き出しですが、また高次倍音の層が多次元的であるにも関わらず非常にフォーカスされています。アグレッシブなハイゲインのコード演奏と激しい単音ソロにも、GAINコントロールを低くしたり高くしたりしながら等しく対応します。例えばこのような設定(GAIN:１１時半から１時半、TREBLE:１２時から１時、BASS:１０時～１２時、PRESENCE:８時～１０時半)にするとリードサウンドとなり、音のめりはりやニュアンス、そして追従性という観点でハイゲインサウンドの中で他の追随を許しません。この品質は、即座の反応が必要だったり、タイトかつ細かいピックのアタックを気にするような、テクニカルなスキルを持つプレイヤーに特に好まれます。アタックの後は、美しい倍音変化が起こり、全てのダイナミクスのレンジや周波数変化から音が切れ目なく湧き出て、喜びの体験となります。今まで演奏したことがないような、新しく見つけた表現の深みまで到達するかも知れません。

ハイゲインでのバッキングについてですが、II-C+は８０年代当時、他のヘビーロック・クランチ・サウンドとしのぎを削っていました。イギリスの元気なライバルよりもより複雑な倍音の層を生み出していたII-C+のサウンドは、本当に恐ろしいぐらいのゲインの壁のように存在していたのです。この中ぐらいのヘビーさを持った攻撃性と完全なサイズは、フロントパネルに搭載された5-BANDグライコとの併用によって、より素晴らしいものになります。厚かましいぐらいに中域のカットを行い、また低域と高域のブーストを同時に行うと、８０年代のレコーディングで有名になり、II-C+サウンドと同義語にもなった、象徴的な"Vカーブ"を作ることが出来ます。このサウンドは有名になるというレベルを更に越えて、"ブギー・クランチ"や、のちに"カリフォルニア・サウンド"と呼ばれるようにもなりました。

９０年代を通しては、我々のDual Rectifierの、準低域を強調しアタックと倍音をブレンドした激しいサウンドが、その１０年においてポップメタルやグランジのサウンドとなっていました。しかしMARKシリーズやグライコを使用したクランチ・リズムサウンド(MARK IVで再度紹介されました)を激しく追い求めるコアなファンも残っていて、このよりタイトかつメリハリのあるサウンドが今やクラシックとして浸透しています。最近１０年においては、II-C+のサウンドは、ProgメタルやPunk、インディーロックやNu-Metalにとってのクランチサウンドのチョイスとなっており、その理由はピックのアタックへの追従がよく、速いテンポにおいてもタイトでいられるからです。

II-C+モードのセッティングで特に危険な範囲や落とし穴等はありませんが、一つだけ明らかに必要なことは・・・GAINを上げるときはBASSを下げる、ということです。また、TREBLEまたPRESENCEを高めの設定にしたときにGAINを最大にはしないで下さい。プリ管が対応できなくなり、ハウリングを引き起こしてしまいます。

MK II-C+モードでより良いサウンドを出すヒント

・ハイゲインセッティングの際、極端に低音を出したいときはグラフィックイコライザー(グライコ)を使用します。グライコは回路の後のほうなので、BASSコントロールを使用したときのように音がルーズになったりずんぐりしたりするのを防げます。

・理想のリードサウンドを探すときは、GAIN, TREBLEそしてPRESENCEの設定に気を付けてください。それらはかなり相互に左右し、ピックのアタックやフォーカスに大きな影響を及ぼします。

・PRESENCEコントロールは低めのセッティングにするとコンプレッション感が得られ、ボーカルのようなキャラクターを生み出します。また高めにセティングすると、高次倍音の領域が開け、刃のような鋭いアタックとなります。

・リードサウンドについて：GAIN、TREBLE、PRESENCEでアタックの微調整を行った後、必要な量をBASSコントロールで設定します。そうすれば必要十分かつサウンドが崩れません。MARKシリーズのBASSコントロールは、美しく豊かなローエンドを持ちながら、即座に他のコントロールとのバランスを取り、また設定を下げるもしくはアタックのキャラクターをスローにします。

・このモードでの低めのゲインサウンドも忘れないで下さい！　倍音成分や素早いアタックの性質から、優れたローゲインのブルースサウンドも奏でます-バッキングでも単音ソロでも-そして更に、ほとんどクリーンと言っていい、素晴らしいスレッショルド・クリップサウンドをも生み出すのです。それはオープンかつダイナミックで、弦を爪弾く際の反応は素晴らしいものです。

・"ギターのノブでのボリューム調整"や"オールドスクールなチャンネル選択"といったアプローチをする昔ながらのプレイスタイルの人にも、このサウンドは有効です。GAINを十分低くしておけば、クリーンのバッキングもいけますしギターのボリュームでリードサウンドを奏でることも出来ます。またGAINをこのように低くしておき、BASSコントロールをもう少し上げると、GAINを高くした時のようなずんぐりとした感じにならずに、サウンドに温かみと立体感を加えることが出来ます。

これが、演奏すると癖になる、本機の6つのモードのなかの一つです。是非、コントロールノブがどのように作用するのか、じっくり時間をかけてチェックしてみて下さい。一度この独自のスタイルにセットすれば、間違いなく魔法が起きるでしょう。

MK IVモード

このモードは、もう一つのMARKシリーズのアンプを改めて復刻させたもので、その象徴的なサウンドは現在の、そして未来の世代が新しいアティテュードとサウンド、そして持ち運びのしやすさを楽しんでもらえるように更に前進しています。大きいMARK Vアンプの先祖であるMARK IVは、製造されてから１８年に渡って地球上で新しいファンを勝ち取りながら、MARKシリーズのサウンドは周りのスタイルやトレンド、そしてテクノロジーの進展によっても時代遅れにならないことを証明したのです。そして今やクラシックとして浸透しています。

MARK II-C+モードと比較すると、MARK IVモードはより低-中域で満たされ、アタックの性格がワイドで鋭くなく、もしかしたら少し高-中域がフォーカスされていないかも知れません。ボトムエンドはより低くなり、またゲインが増えたことにより、サウンドの厚みと迫力が増して、巨大なクランチ・コードとスムーズなボーカルのような単音サウンドが生み出されます。これらの回路の違いは同様に異なるフィーリングも生み出し、MARK IVモードではよりクリーミーで弦を弾いた時の抵抗感がないような印象を与えるため、多くのギタープレイヤーにとっては演奏しやすくなるでしょう。またローエンドを加えることによりほんの少し反応の速さを抑えたアタックは、MK IVモードを少し"ゆっくり"そして抑えめに感じさせ、ピッキングテクニックが"顕微鏡の下に置かれているような"感じになるので、見方やスタイルによってはより自由に、または鮮明でないように感じるかも知れません。どちらにしても、中域にフォーカスされ突き刺すようなアタック感のあるMK II-C+モードと良いコントラストを描いており、間違いなくあなたのニーズに合うサウンドが見つかることでしょう。

GAINを低めに設定した場合のMARK IVモードは、II-C+よりもサウンドにエアー感があって立体的です。素晴らしいスレッショルド・クリップサウンドは、GAIN設定はかなり低め(9時～１０時)、TREBLEは１２時半ぐらいの設定にして得ることが出来ます。II-C+のときと同様、GAINをこのように低く設定した時は、サウンドがずんぐりとならない程度にBASSを少し上げると(１１時～１時半)、エアー感が出ます。またここはマルチワットの出力モードを掘り下げるのにちょうど良い領域です。25W設定では荒々しくパンチのあるサウンドとなります。10W設定では、少しレイドバックしたようなアタックのキャラクターとなり、低出力のニュアンスを伴い倍音がより複雑なサウンドになって、演奏しやすくなります。

MK IVモードのハイゲインサウンドは図太いです！　BASSコントロールを低めにし、GAINは低-中域ぐらいにすると、アンプ全体が最も大きいクランチ・コード・サウンドを生み出します。この方法で、より低い音域のボトムエンドが早く膨張してしまわないか、BASSコントロールの設定に注意します。もしハイゲインサウンドで巨大なボトムエンドのサウンドが欲しいのであれば、グライコの80Hzと240Hzを上げたほうが賢い方法です。BASSコントロールは、もしその機能を忠実に果たすとすれば、プリアンプの前のポイントのシグナルパスに準低域を過度に持ってきてしまいます。この"早すぎるBASS"は、音がおかしくなるまで増幅されるため、シグナルチェーンの最後に来るグライコでローエンドを足したほうが"完成されたプリアンプサウンド"になります。

重要です！　ピックアップについてのアドバイス

ギターのピックアップは、全体的なトーンの性格を決める大変重要な要素です。多くのプレイヤーは全ての音楽スタイルを一つの楽器で演奏することにこだわり、アンプで音を決める際に何か問題があると、(数十年に渡って我々がサポートを行ってきた上の経験ですが)プレイヤーはよくサウンドのスタートがどこで、(大部分がここで決まるのですが)彼らの楽器からアンプへ何が送られているかを見過ごしがちです。

ハイゲインサウンドは特に出力の感度とピックアップのボイシングに敏感で、ハイエンドが強調されている場合は尚更そうです。我々の経験では、出力が弱めのビンテージスタイルのピックアップは高次倍音を強調するので、低〜中程度のゲイン設定では、素晴らしくキラキラとした、ベルのような倍音と透明感を得ることが出来ます。よりハイゲインで演奏したい場合は、ゲインが増加するたびに高次倍音がきらめく、このビンテージタイプのピックアップを試す価値はあります。また、ビンテージスタイルのピックアップを使用して、フォーカスされたピュアなハイゲインサウンドを作りたいときは、TREBLEとPRSENCEの設定を大幅に下げる必要があるかも知れません。

もしハイゲインサウンドがこもってしまっている場合は、特にバッキングの際にサウンドにまとまりとタイトさを得るために、(少なくともブリッジ側で)高出力のピックアップが必要であると既に感じているのではないでしょうか。もしそう思っていなくても、いくつか異なる高出力のピックアップを試してみることをお勧めします(トップエンドとは対照的に、どちらかというと中域や高めの中域が強調されます)。このボイシングの違いが、クランチ・コードバッキング向けのタイトなローエンドや、ソロ演奏向けのボーカルのような単音サウンドを生み出すのです。

高出力ピックアップのいくつかは、ハーフサウンドが得られるタップも使用可能で、出力弱めの明るいサウンドとフルの高出力サウンドの両方の良いところを得ることが出来ます。タップは通常小さいトグルスイッチかプッシュ・プルのポットで操作しますが、標準の5ポジションスイッチまたは3ポジションのトグルスイッチの任意のポジションでハードワイアーされることもあります。これは最大限の音の幅を得つつ、高い倍音をキープしたまま低〜中のゲイン領域でオープンなサウンドを得るのに最も優れた方法で、例えばライブ中に、タイトで迫力のあるヘビーサウンドが得られる高出力/ハイゲインのサウンドに切り替えることが出来ます。

サウンドの秘密：
あなたの演奏するアンプは、あなたが一番自由に演奏できる、どんなスタイルのギターサウンドでも対応することが出来るようにデザインされています。また、理解し十分活かすのに時間が掛かる -もしかしたら数年- もう一つの隠された性格を持っています。

MESA BOOGIEにいる我々の多くや世界中のMARKシリーズの忠実なファンたちは、振り返って考えると、MARKシリーズのアンプはそのポテンシャルについて考える良い教師であるということが分かります。

音が良くない、それはもしかしたらでっち上げではないしょうか？　そうかも知れません・・・しかし我々は、初心者でも長い間MESA製品を愛してくれているファンでも分け隔てしませんので、MARKシリーズを使用して演奏やテクニックが向上したということがあれば教えて欲しいと思います。彼らのコメントは、アタックがはっきりしていてタッチが繊細なので、全てが正確でなければならず、テクニックやフレージングに非常に気を遣うということです。またフィーリングについては、大変エモーショナルになるとのことです！　私(筆者)はこれらの素晴らしい点については同意しますし、子供時代からMARKシリーズばかりを演奏していたので、プレイヤーとしても向上したと心から思います。何と呼ばれようと、MARKシリーズのアンプ無しでライブをするぐらいなら家にいてアコースティックギターを弾きます。

あなたにこのサウンドの秘密を読んでもらって世界中の皆がそうしているように少しでもお役に立てて頂き、想像もしていなかった世界で演奏して頂くことを心から望んでいます。

XTREME(エクストリーム)モード

チャンネル2の最後のモード(エクストリーム)は適切に、というか"更にもっと"という感じのネーミングです！ 更なるゲイン、アタック、激しい中域、よりタイトで巨大な低域そして既に気付かれているかも知れませんが、より出力の高いボリュームです。一字少ないにもかかわらず、本機のモードの中でも最も過激なサウンドを生み出します。

XTREMEモードはMARK IVの血統を引き継いでおり、元はチャンネル3の(LEAD)PRESENCEコントロールに属していました。プッシュ・プルポットが装備されていて、パワー部の余分なフィードバックを取り除き、サイマルクラス™出力の鬱積された激しさを解き放ちます。

現在は大きいMARK Vヘッドとこのコンパクトな EL84管仕様のアンプに一つのモードとして搭載されていますが、XTREMEモードはパワー部のPRESENCE回路が(一つの選ばれた高域の代わりに)全ての周波数に等しく対応するもので、"コントロール"という要素とパワーアンプに内在するコンプレッションを取り除きます。この"リアエンド"のワイドなEQカーブは、過激に解き放たれた"オープン"な性格を持ち、"フロントエンド"のプリアンプ回路とは全く異なります。この過激で攻撃的なパワーの性格が、MK IVモードの倍音の層を伴ったハイゲインの壁と合わさったときに、驚くほどのアタックと性急さを伴ったサウンドが生み出されます。

本機のXTREMEモードは、何年にも渡る我々のハイゲインモードについての蓄積を全て利用し、どこでTONEが変化するかという知識も活かされています。トップエンドは温かく、ローエンドはタイトかつフィーリングが向上しており、先祖のMARK IVよりも表現力豊かで演奏がしやすくなりました。MARK IVのオーナーの中には、MARK IVのノッチサウンドのほうを好む人もいるかも知れませんが、アタックやボディ、しなやかなフィーリングと柔軟性を持った本機のXTREMEモードのサウンドは、より色々なスタイルに対応します -低めのゲイン領域でも試してみて下さい- それは高出力のMARKシリーズは簡単にはたどり着けない部分です。

多くのヘビーサウンドの愛好者は、XTREMEモードでGAINをかなり高めに設定して、それでもアタックやタイトさはハイゲインバッキングのために残すというようなやり方が好きです。そのタイトさを得るためにTREBLEを高く設定する必要はなく、１２時～１時ぐらいが普通です。覚えておいてもらいたのは、ハイゲインでのコード演奏にはBASSコントロールを低め(１０時～１１時)に設定したほうが良く、ローエンドを更に加えたい場合はグライコの80Hzと240Hzのスライダーを調節してボトムエンドを加えます。グライコはシグナルチェーンの後に来ますので、プリアンプの最初のほうに来るBASSコントロールよりもタイトさが長く続きます。

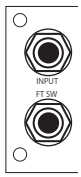
上記にありますが、XTREMEモードをGAINを低めの設定で使用すれば、いくつかの性急かつアティテュードがパックされた低いゲインサウンドが得られます。このタイプのサウンドには、BASSコントロールを１１時半～１時半ぐらいまで上げて、立体的な温かみをサウンドに加えることが出来ます(ゲインが低ければ、不要なサウンドが生まれることはありません)。

XTREMEモードでPRESENCEコントロールを操作すると出力が落ちることがあり、その理由は不要なフィードバックが広い周波数帯(PRESENCE回路も含みます)で徹底的に削られるからで、つまりはPRESENCEコントロールによって悪影響を及ぼされる周波数帯が狭いということです。TREBLEコントロールの設定によって十分な高域があってもそれは関係なく、グライコの上の周波数帯で好きなだけサウンドを明るくすることが出来ます。

XTREMEモードは、本機において最も過激でフルスロットルなサウンドです。MK IVモードで全てを聴いた気になっていても、XTREMEモードは新しいレベルのアグレッシブなサウンドであなたに相対峙します。楽しんで下さい・・・ですが、それはスピーカーの前にいると本当に激しいサウンドですので、注意が必要です。

コントロール

INPUT(インプット)



プリアンプにギター信号を入力するINPUTジャックです。楽器用ケーブルを接続しますが、なるべく高品質かつシールドされた3.6〜4.5m以下の長さのものを使用して下さい。長いケーブルはキャパシタンスの増加によるハイ落ちを起こしてしまいます。

注意：電気信号のチェーンの全ての部分がそうであるように、ケーブルもサウンドに劇的な変化を与えます。我々は超・低キャパシタンスのサウンドやとても高価な"ハイファイ"な楽器用ケーブルを特に好むわけではありませんが(我々の耳にはトップエンドが多過ぎるように聞こえるため)、楽器接続用には、著名なブランドのシールドケーブルのご使用を強くお勧めします。

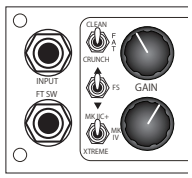
FT SW(フットスイッチ)

ステレオのフットスイッチケーブル(Tip, Ring, Sleeve)を接続するステレオジャックです。本機に付属のフットスイッチをここに接続し、3ポジションのFSミニトグルスイッチ(パネル右端のチャンネルごとのモード切替の間にあります)をFS(真ん中の位置)に設定すると、フットスイッチが各チャンネルにアクセスします。フットスイッチを使いたくない、または持っていないという場合は、トグルスイッチを使用するチャンネルに設定します(チャンネル1の場合はスイッチ上側、チャンネル2の場合は下側です)。

注意：フットスイッチでチャンネル選択する場合は、FSミニトグルスイッチは真ん中のFSの位置になければなりません。

GAIN(ゲイン)

このコントロールは本機において間違いなく一番パワフルであり、このセッティングがチャンネルそれぞれの全てのモードのサウンドスタイルや方向性を決定します。呼び出されるチャンネルやモードによって異なるチューブステージのゲインを測定し、インプットステージのヘッドルームにセットされ、サウンドがクリーンになるかオーバードライブされるかが決まります。また微妙なTONEコントロールとしても機能し、チューブステージのゲインが増減され、サウンドに独自のカラーを与えます。



両方のチャンネルには、3つのGAINコントロールの領域があります。低いGAIN領域は9時〜11時半の間で、より温かく歪んでいるのが12時〜2時、そしてより高いGAIN領域が2時半〜5時半です。どの領域も多様な用途に使用でき、コード演奏でも単音のソロ演奏にも対応します。またGAINコントロールはその領域全体をスイープしますので、異なったフィーリングとトーンのキャラクターを持ちます。

概して、どちらのチャンネルやモードについても、GAINコントロールが低いとき(9時半から11時)は音がブライトになり、よりオープンな性格とダイナミクスを生みます。この領域はクリーンサウンドに優れており、チャンネル1では最大のヘッドルームが生み出す輝くコードサウンドが得られ、トップエンドの倍音が弾けてアタックがとても速くなっています。チャンネル2でのこの領域は驚くほどのスレッショルドサウンドを生み出すように調整されており、ゲインは温かくこもっていますが、ギターの持っているサウンドは損なわれていません。このより低い領域はチャンネル2の全てのサウンドでスレッショルド・コード演奏をするのに優れ、歪みによってまだ圧縮を受けていないダイナミクス豊かなサウンドとなっています。同じモードでも、GAINが低くなっていればオールドスクールなビンテージサウンド、高ければ迫力のあるハイゲインサウンドが得られるということに嬉しい驚きを得るでしょう。

GAINコントロールの中域(11時〜2時)は、もっともバランスが取れたサウンドが得られるところで、シグナルの中で尚パワフルな効果を持つTONEコントロールと併用して、温かくフル・サウンドで、アタックがきめ細かく、良いダイナミクスを持ったサウンドを作り出せることが分かるでしょう。チャンネル1のCLEANモードやFATモードにおいては、素晴らしいコードのレスポンスとリッチ、そしてもう少しボディもあるサウンドが得られます。ピックアップの種類や強さにもよりますが、ここはヘッドルームが減少を始める、ゲイン的にクロスオーバーするポイントの近くであるため、クリップしないように注意しなければなりません。

チャンネル2のモードがオファーするのは、最も象徴となる、この中域の領域のフォーカスされたサウンドです。チャンネル1とは対照的にすべてハイゲインとなっており、ベストなダイナミックレスポンスとアタックのキャラクターは、この領域の一番低めの設定で得られます。2時ぐらいに設定すると、迫力あるコード演奏や単音での演奏にマッチした十分な歪みが得られ、サウンドにコンプレッション感が増えるのが分かります。もしチャンネル2のこの領域で良い結果が得られない場合は、より高出力のピックアップを試してみてはいかがでしょうか。チャンネル2のモードは、この中域の高め設定(12時半〜2時)で咆哮を上げます。

GAINの一番高めの領域(2時～5時半)は、完全に歪んだサウンドとなります。ここからシグナルがローエンドで太くなり、トップエンドが減少して圧縮されたサウンドになります。ダイナミクスもより低いピークでスローになり、よりレガートな、クリーミーなフィーリングとなります。チャンネル1ではGAINコントロールのハイエンドは素晴らしいクリップとオーバードライブしたクリーンサウンドを生み出し、インプットステージが歪み始めていました。このサウンドは10W出力モードでより強調されます。

チャンネル2では、GAINコントロールがこのように高めに設定されている場合は完全にフルスロットルのサウンドになります。より中域が押し出され、音にメリハリが出て、また歪みの量も十分になってきます。確かにこの小さなパワー部は、大きいMARK Vアンプの6L6管よりもソフトで反応も素早く、またフォーカスされメリハリも効いていて、音への追従性もタイトにキープしています。

注意：ご注意頂きたいのは、このあたりの領域から、音がかなり歪んでいるのでTONEコントロールの効果が弱くなり、それぞれのモードのサウンドはいかにプリアンプでゲインのレベルと反応するかでキャラクターが決定されるということです。またそれは、低出力のパワー部がドライブするかしないかにもよってきます。

注意：再度繰り返しますが、このような低出力のパワー部は、高出力のアンプ(50Wや100W)よりもプリアンプのGAINコントロールを低めに動作させ、EL84管は割に合わない仕事をして全体的に必要な"ドライブ"を供給します。もし非常に低音量で演奏しないのなら、そういうことです。このGAINコントロールに対しての伝統的なアプローチは、よりメリハリが効いてタイトなアタックを持ち、まとまったサウンドになります。

TREBLE(トレブル)

GAINが本機において一番パワフルなコントロールだとすると、TREBLEは2番目となります。TREBLEコントロールは、チャンネル/モード全体のキャラクターのシェイピングを行います。簡単に残りのTONEコントロールを支配するので、各チャンネルの全ての3つのモードで豊かかつバランスの取れたサウンドにするためにはセッティングは非常に重要です。実際、TREBLEはMIDやBASSに信号を供給する、まるで信号強度のバルブのような役目を果たしています。

TREBLEが高め(2時～5時半)に設定されているときは、MIDやBASSコントロールに送る信号は小さくなり、MIDとBASSはあまりアクティブではなくなり、TREBLEのブライトなキャラクターの一極支配となります。反対に、TREBLEの設定が低いときは少しBASSに比重がかかり、サウンドがダークになって信号のほとんどがMIDとBASSコントロールに行きます。ですのでTREBLEの設定はTONEコントロールでハーモニーを形成するのに極めて重要だと理解した上で慎重に行わなければなりません。

TREBLEを中域にした場合はどのチャンネル/モードでもベストなバランスとなり、十分ブライトでありながらそれでいてリッチで温かいサウンドとなります。最初はTREBLEを12時からスタートして、お好みのトーンが得られるまで少しずつ上げたり下げたりすることをお勧めします。また、PRESENCEを使えば、他のTONEコントロールに影響を及ぼすことなく(少し高めの)トップエンドを加えることも可能です(PRESENCEはシグナルパスのより先のほうの回路に位置しているからです)。

注意：チャンネル1でGAINを上げて、クリップしたブルースサウンドを得たい場合のTREBLEの設定領域についての注意があります。TREBLEを高め(1時半～2時半)に設定するとチャンネル1のモードに歪みが加えられるので、プッシュしたサウンドが得られます。またサウンドをタイトにするにはBASSを低め(8時半～9時半)に設定する必要があります。

注意：TREBLEを高め(2時半～5時半)に設定すると、プリ管(ハイピッチの共鳴やノイズに敏感)に過度なストレスがかかり、共鳴ノイズやその他不安定な兆候を示します。本機に搭載される真空管(チューブ)は、製造の際に問題がないよう多くのテストが行われています。しかし、真空管自体が電球のように完璧なものではないため、変化が起こり、よりマイクロフォニックになることがあります。このような真空管の問題に対しての一番の対策としては、単純に真空管を交換することです。

MID/BOOST(ミッド/ブースト):チャンネル1

このコントロールは実際には二つのコントロールが一つのノブに集約されているため、二つの名前が併記してあります。通常のMIDコントロールに加えて、この"連動"ポットはチャンネル1の全体にゲインを追加して中域に温かみと丸みを加えることが出来ます(コントロールの上半分の、5.0〜10.0にて)。この機能は、70年代にオリジナルのMARK Iに最初に搭載されたのですが、登場した際はON/OFFスイッチでした。現在はON/OFFスイッチではなく、調節可能なポットとなりました。その当時のスイッチとしては、TONEコントロールを引っ張るとゲインを大幅に増加し、ぐるぐる回るロータリーのTONEコントロールでシグナル全体にかかるものでした。それもその当時としては素晴らしく革新的な機能だったのですが、二つの欠点がありました;一つは、ONかOFFか(通常かブーストか)しかなかったことで、BOOSTポジションで起こる歪みのために、通常時とのサウンドの差が激しかったのです。二つ目は、全体的なシグナルがBOOSTによって解き放たれたので、TONEコントロールが機能するゲインが残らず、BOOSTモードではほんの少ししか意味をなさなかったのです。

それでも人々は新しいゲインに心を奪われたのですが、引き換えに得たのがサステインです! しかしここはMESA BOOGIEです、TONEは決して眠らさず、この新しいMARKシリーズのアンプでは調節可能なBOOSTコントロールをMIDコントロールの上半分に持ってきました! それですべてが解決したというわけではありませんが、以前はゲインを加えるとトーンシェイプのためのパワーが減ってしまって得られなかった中域を今回は得られるのです。MID/BOOSTが最大(10の位置)の時は、TONEコントロールのためのゲインが少しですが残っています。この新しい構造のMID/-BOOSTは、ゲインを加えることと、トーンシェイプを行うことの二つの間の求めるバランスを選択でき、ブーストされた中域という新しい領域で、真のマジックサウンドを実現できるのです。

MID/BOOSTが0〜5.0の設定では通常のMIDコントロールが機能し、少し凝縮されたテーパーとなります。この狭めのテーパーでの一般的なセッティングですが、欲しいサウンドを通常のMIDコントロールで設定するときのノブのポジションの2または3ぐらい下の位置に本機のMIDを設定します。

注意:通常のMIDコントロールの領域は、少し凝縮されたテーパーで0〜5.0の間に設定されています。5.0以上になるとBOOST機能となり、TONEコントロールの効果が薄れる一方、中域の周波数帯でゲインがブーストされます。

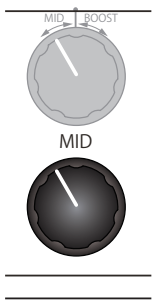
5.0以上の設定するとMIDコントロールは調節可能なBOOSTコントロールに変化し、TONEコントロールを持ち上げ、信号強度の全てを解き放ちます。プレイヤーによっては可能な限りのゲインを望むでしょうから、オリジナルのMARK IのBOOSTモードでみられたTONEコントロールと同じ一定量の出力を備えています。しかしいつも最大のゲインブーストが必要でないプレイヤーのために、中域の広い範囲で温かいサウンドが得られる、本当に有効な範囲の強化されたゲインを備えています。

このシンプルでありながらパワフルな改良が施されたTONEの可能性について我々は大変喜んでおり、サウンドと、低いゲインの"CLEAN"モードを選択できるという操作性の両方が改善されており、この明らかな効用についてはMESAから特許出願がされております。シンプルなアイデアは大抵ベストなことが多く、40年も共に歩んでゆくのに一番簡単な方法でもあります。特許事務所の人間がギターを演奏すれば良いのですが・・・我々は祈るのみです。

この価値のある改良を、チャンネル1の3つのモードのどれとでも組み合わせて使用し、素晴らしいスレショルドのクリップ・コードサウンドまたはブルース・ソロのトーンを作ったり、または既にオーバードライブしているサウンドに使用して厚みを持たせたり更にブーストさせたりも出来ます。気付いて頂きたいのは、追加する先のゲインよりここには更にゲインがあり、それでもなお明快なアタック特性を持ったバランスの取れたサウンドをキープしています。言い換えますと、TONEコントロールが効かないほどゲインを上げてサウンドを損なわないようにして下さい。単純ですが、しばしば見過ごされがちなポイントです。

MID/チャンネル2

MIDコントロールはチャンネル2においては、より通常の、というかそのままトーンコントロールとして機能します。MIDコントロールはGAINやTREBLEコントロールのように広範囲に渡るものではありませんが、それでも中域(MID)の設定は、3つ全てのモードのサウンドにおいて強い影響を及ぼします。中域の広い範囲で作用し、前に述べたように、かなりの量の"低-高域"の周波数が伴います。この高域は、



TREBLEやPRESENCEのものよりも低い領域ですが、サウンドミックスの中でアンプのサウンドにパンチを与えたりカットをするときに重要です。

チャンネル1のCLEANやFATモードでバッキングを行う際は、MIDの設定を低め(7時半〜10時)にしてこの範囲の中域のアタックをカットし、ボトムエンドにより息吹を与えます。またこの領域は音に張りがあって演奏しやすく、弦を弾いたときに弾むような感覚があります。シングルコイルのギターは特によくマッチし、スマートでゴムのようなアタックと跳ねるような低音のキャラクターはブルースやR&Bまたはカントリーのクリーンサウンドによく関連付けられます。

中域の中間位置(１１時～１時)は、パンチとアタックが大きくなり、より性急さも加わって、マホガニーギターでサウンドメイクするのに最適です。高・中域と低めのトップエンドがMIDコントロールの範囲の中で姿を現し始め、コード・サウンドがより押し出されてパンチの効いたキャラクターとなって美しく鳴り始めます。

さらに上げると(１時～５時半)、アグレッシブなサウンドとなり、MIDの領域内で支配的かつ過激なトーンを生み出します。この範囲になると、MIDが高すぎて隠れてしまったリッチさや温かみを、BASSコントロールを上げて戻そうと試みるかも知れません。もしMIDのこの領域のアタックや性急さがお好みであれば、他の全てのコントロール(MASTERを除き、サウンドが前に出るように)を高めに設定してMIDのカーブに追従するようにします。これで良いのですが、プリアンプのヘッドルームがこのトーンの激しい競争によって食べ尽くされてしまうので、TONEコントロールの設定から来る高信号によってプリアンプがクリップし始めます。

チャンネル２のゲインサウンドも、MIDの設定が上がると同じようになります。低めの設定(７時半～１０時半)ではワイドで、跳ねるようなフィーリングのコードサウンドや、よりクリーミーでスムーズな単音のトーンが得られます。ゲインによって作られる高次倍音はTREBLEやPRESENCEによって大きくコントロールされますが、艶のある立体的なかすみがサウンドにかかり、MIDがこの低域に設定されているとちょうど良い感じになります。またMIDがこの領域で上がっているとより厚いパンチと低・高域のアタックが姿を現してきてサウンドがより前に出ます。またMIDの設定が１時を過ぎるとサウンドが更に前に出て、同時に倍音が後退し始め、パンチや中域の増加に伴うフォーカスされたサウンドに取って代わられます。

注意：チャンネル２のモードでMIDの設定を試すときは、サウンドと同様フィーリングにもご注意下さい。MID(中域)はダイナミクスと演奏するときの弦のフィーリングを劇的に変化させます。低めに設定するとよりクリーミーで中域がカットされた単音のソロサウンド、高めの設定のときはパンチのある本物のクラシックロックのクランチリズムサウンドが生み出されます。

BASS(ベース)

MIDコントロールと同様に、BASSコントロールも普通のTONEコントロールのように機能し、サウンドに丸みをつける豊かなボトムエンドをブレンドします。異なるモードが選択されると内部のスイッチが作動し、本機の６つの回路に合わせて低域の位置と帯域が変化します。これはそれぞれのサウンドにとって非常に重要で、トーンキャラクターの大部分を占めています。

チャンネル１のCLEANとFATモードは、他のモードにおいて深さや立体感、そしてエアー感がサウンドに加わる際よりも更に低い低域を共有しています。これによりチャンネル１はこの巨大なローエンドとハイゲインの回路とのバランスを取るために、よりスローなテーパー・ポットが必要となります。チャンネル１のCRUNCHモードと、チャンネル２のほとんど全てのモードは、より高めの低域を使用しています。これにより、よく響く素晴らしい音質とタイトさを生み出し、ゲインサウンドに弾みとダイナミクスそして活き活きとしたフィーリングを与えます。この高めの帯域は、CLEANやFATモードで使用されている低めの帯域と比較してよりうまく使用でき、その理由は、速いプレイをした際にスローになったり邪魔をしたりしないからです。

チャンネル２のXTREMEモードでは、BASSコントロールのより高めの帯域を使用することができ、巨大な量の高・中/低・高域のアタックがあります。XTREMEモードでBASSコントロールを１０時～１２時に設定し、巨大なクランチリズムサウンドを試してみて下さい。もしボトムが足りなければ、グライコの80Hzと240Hzの設定を上げてみて下さい。

GAINがとても高く設定されているときは、単音の演奏でもコードサウンドでも、常にBASSコントロールは動かす範囲を低め(７時半～１０時)にすることをお勧めします。GAINを低めにし、BASSの設定を１０時～１２時にすると、プッシュされたリズムサウンドやブルースのソロに最適な活き活きとしたサウンドになります。

PRESENCE(プレゼンス)

このコントロールでTREBLEよりも更に高い帯域を調節します。シグナルパスの流れの先のパワー部に位置しており、他のロータリー式トーンコントロールのようにプリアンプには位置しません。PRESENCEは、パワー部のネガティブ・フィードバック内の特定の帯域の調節を行うので、個々のモードの調節に最適です。本機は複雑なパーツのスイッチングを可能にするため実際の回路を共有しています。またそのパーツは各モードのサウンドを正しく出力し、PRESENCEで調節可能な領域を確実にするために必要なものです。またPRESENCEは音楽的に有効であると同時に、サウンドのスタイルでもあります。

あなたはもしかしたらPRESENCEを、パワーアンプの出力を落としたり、サウンドを圧縮してダークにしたり、または高次倍音を全て開放するようなコントロールだと考えているかも知れません。他にも、信号のダイナミクスを調節したり、アンサンブルの中での音抜けをいかに良くするかを設定出来ます。

低めの設定(7時半～10時半)では、サウンドは温かく丸くなり、またコンプレッション感が加わり、ダイナミクスの上下はいくらか制限されます。PRESENCEを上げると(11時～2時半)、トップエンドがより支配的になってきてコンプレッション感がカットされ、ダイナミクスのピークが驚くべきスピードと正確さでジャンプします。コントロールをトップエンド(2時半～5時半)に設定すると、高次倍音の超アグレッシブなミックスがサウンドを支配し、少しでないといくらか危険な領域となります。高音はその勇敢な耳をつんざき、潰しかねませんので、この領域を使用するときはスタジオでヘビークランチサウンドをレコーディングするときであるとか、その場合でもほとんどを低音弦で演奏したものにすることをお勧めします。またこの領域は、P.A.で多く使われるマイクの周波数カーブと同時に存在する場合は、本当に危険です。

PRESENCEコントロールに関しては、低めから真ん中(9時～12時半)の設定をお勧めします。どのモードにおいてもベストな(一番バランスの取れた)サウンドが得られます。この範囲外で冒険をするという場合は・・・アグレッシブなトップエンドのピークや、本当にダークな、高いコンプレッション感のあるサウンドのような、本当に極端なサウンドが必要ということなのかも知れません。

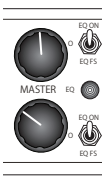
チャンネル1のCLEANサウンドは、PRESENCEをほんの少し高め(10時半～12時)ぐらいで設定したほうが、オーバードライブがかかっているよりも大抵良いサウンドになります。一旦歪み始めると、PRESENCEコントロールが作用する周波数帯がとげとげしく不安定になります、また気を付けていないとすぐにサウンドがおかしくなります。オーバードライブがかかったコードサウンドであれば、高め(10時半～12時半)にも設定でき、かつ単音のサウンドよりもトーンは良くなります。単音であれば、普通は11時以下に設定して、丸く、フォーカスしたボーカルのようなサウンドを狙ったりします。

注意：チャンネル2のXTREMEモードは、パワー部のネガティブフィードバックを過激にリボイシングして、他のどのモードよりも高次倍音の領域があります。これはトップエンドのカットと攻撃性が増し、PRESENCEコントロールが他のモードより効かなくなるということです。理由は、PRESENCEにかかるネガティブフィードバックが少ないためで、XTREMEモードには既に同じような鋭いサウンドキャラクターが十分あるということです。

注意：お気づき頂くために再度繰り返しますが、PRESENCEの高めの設定(2時半～5時半)はマイクロフォニックのプリ管の境界に過度なストレスをかけ(プリ管はハイピッチの共鳴やノイズの影響を受けやすくなっています)、共鳴し始めたり動作が不安定になります。我々は製造の際に、本機に搭載される真空管に問題が無いか多くのテストを行っています。しかし真空管というものは電球がそうであるように完璧な機器ではありませんので、何度も変化してよりマイクロフォニックになることがあります。このような真空管の問題に対しての一番の対策としては、単純に真空管を交換することです。また極端に高いPRESENCEの設定を避ければ、このような真空管のマイクロフォニックの問題を減らすことが出来ます。

MASTER(マスター)

このコントロールは各チャンネルの全体の音量を決定します(プリアンプ部の最後に位置します)。GAINコントロールとのコンビネーションでプリアンプの信号強度(モードのパラメーターを含みます)を、演奏する音量に合わせて決定します。使用するチャンネルでモードとコントロールの設定が終わったら、MASTERコントロールで各チャンネルの音量のバランスを取って下さい。



またMASTERコントロールは、エフェクトループのSENDレベル(リアパネルのアウトプットの信号強度)も決定します。尚、信号強度を決定するときは、CLEANサウンドのほうがよりダイナミックかつダイナミクスのピークがコンプレッションのかかったハイゲインのサウンドよりも速いため、注意して下さい。例えば、SEND信号が入力される外部プロセッサーのインプットLEDを視認しつつ、耳でもバランスが取れているか確認して下さい。クリーンサウンドでもし音がクリップしていないようなら、もしLEDが多少の信号強度を示していたとしても、音量的な問題はないでしょう。

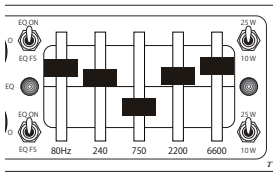
全てのモードにおいての通常そしてベストなパフォーマンスを得るには、MASTERコントロールの設定を9時～12時の範囲に設定します。多くのプレイヤーは、平均的な音量を10時半あたりに設定しています。

純粋主義者の人は、MASTERをフルにしてGAINを好みの音になるまで上げたりします - 考えると確かにこのやり方はもっとも純粋と言えます。理論的には、彼らはこの方法でコントロールを全てシグナルパスから切り離しているわけで、やり方に問題はありません。しかし、MASTERコントロールが付いていない多くのビンテージアンプは、プリアンプからパワーアンプにいく出力を調節または微調整を行うために、回路にある抵抗で行います。

本機のMASTERコントロールは実際可変抵抗以上のものであり、音が損なわれること無く自由に何度でも設定が行えます。もしオールドスクールなアプローチを試すのであれば、是非ともMASTERコントロールをこのように使って下さい(アンプにもダメージを与えません)。しかし、GAINとMASTERの両方をコンビネーションとして設定すれば、ほとんど無限に近い形で素晴らしいサウンドメイクが可能ですので、そのポテンシャルを制限してしまうことにはなります。

本機について覚えておいて頂きたいのは、より低出力のパワー部であるため、10W出力設定により適しているということです。最大のヘッドルームとしっかりしたパンチ、そして活き活きとしたダイナミックレスポンスを得るには、MASTERは保守的(パワー部が早くクリップし過ぎない程度の一定のレベル)に設定する必要があります(特にクリーンサウンドでは)。中ぐらいの出力のピックアップとGAIN中ぐらいの設定で組み合わせると、MASTERコントロールが大体１０時４５分～１１時の位置で最大のパワーに到達してパワークリップを得られることが分かりました。更に高出力のピックアップまたは高いゲインの設定だと、それが更に早くなります。

5-BAND GRAPHIC EQ (グラフィック イコライザー)



(前述の"概要"にて部分的に触れています)

MARKシリーズのアンプはオリジナルのMARK Iまで遡りますが、パワフルなトーン・シェイプ機能であるBoogie™ 5-BANDグラフィックイコライザー(グライコ)を装備しています。当時それはBoogieアンプを他のアンプと引き離し、今日までMARKシリーズのサウンドの象徴であり続けるほどの革新的な機能でした。数十年に渡ってクラシックとなった多くのMARKサウンドはこのグライコが使用されており、中域に特徴のあるMARKシリーズのプリアンプの反対のサウンドとして、過激に中域をカットされた"ドンシャリ"サウンドが得られるように設定されていました。このように加工されたサウンドの中で最もポピュラーなのが、真ん中が"V"の字に落ち込んだもので、中域が過激にカットされつつ低域と高域がブーストされており、ハイゲインのコードサウンドが巨大になります。この"V"カーブは、多くのモダンメタルやヘビーサウンドの心臓部であり、ほとんどの人がMARKアンプの常識(のサウンド)として認識しています。事実とは異なるのですが、5-BAND EQがどれぐらいパワフルかという一つの例として、"ヘビー"とはどういうサウンドか、という世界的な共通認識と一緒に語られたりします。

750HzのEQスライダーは、この過激なサウンドの重要なポイントです。センターラインの下までスライダーを下げ、下の"カットライン"近くまで下げると、サウンドに広さが出て、低域(ロー)と高域(ハイ)がその隙間を支配します。他のスライダーを上側にある"ブーストライン"近くまたはそれより上げると、よりこの効果が上がってローエンドには深い響き、トップエンドには倍音の広がりが加わった巨大なサウンドを形成します。このEQカーブ("V"カーブとして知られています)は多くのクラシックロックやメタル、ニューメタルやProgのクランチリズムサウンドのエンジンであり、搭載されているBoogie 5-BANDグラフィックイコライザーの使用方法の中で最もポピュラーなものであり続けています。

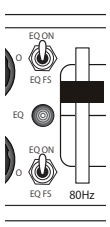
もしあなたの音楽性がこれらのミッド・スクープ(カット)サウンドに依らないものだとしても、それでもグライコのサウンドシェイプのパワーというのは信じられないほどの価値があります。実際あなたが強調したい周波数帯やキャラクターはどれでも、このパワフルなブロードバンドのシェイピング機能で強化することが出来るのです。

本機のTONEコントロールは広い範囲で正確に有効である一方、プリアンプのシグナルパスの前のほうに位置するため、TONEを大きく変化させた結果、ある種のモードではアンバランスになる可能性があります。一つの例がチャンネル２でのBASSコントロールで、MARK II-C+やMARK IVモードでボトムエンドを(プリアンプの前のほうで)ブーストさせすぎた結果、サウンドがずんぐりとしてまとまりのないサウンドになってしまいます。

グラフィックイコライザー(グライコ)はシグナルチェーンの一番最後に来るため、(スピーカーから出てくる音を聞き分けながら)どの周波数を変化させたいかだけを考えた、最終的なサウンドシェイプが行えます。唯一考えなければいけないのは、25W出力のときに、80Hzと240Hzの二つの低域で極端なセッティングを行うと、パワー(ワット)をあっという間に使い果たしてしまい、全体のヘッドルームに影響するということです。また、このことは10W出力モードではより顕著ですので、ベストなパフォーマンスが得られるように注意して設定を行って下さい。

注意：EQスライダーは少し動かしただけでもかなりの効果が望めますので、この機能を賢く使ってお好みのサウンドが得られるようにして下さい。また、設定しているうちにやりすぎて全てのEQスライダーをフルにしてしまって肝心のトーンを損なうことに陥りがちなので、時々はEQトグルスイッチやフットスイッチを使って設定前の状態に戻ったりしながら、客観的にサウンドを判断出来るようにするのが良いでしょう。

EQスライダーの左横にはそれぞれ各チャンネルに対応したミニトグルスイッチがあり、5-BANDグライコの操作状態を選択でき、またシェイピングパワーを使用する方法を二通りから選べます。



各チャンネルで、EQを使用するための3つの方法を選択できます：

EQ ON (トグルスイッチ上側) - 任意のチャンネルで常にEQがONになります

0 (トグルスイッチ真ん中)- 任意のチャンネルでEQが常にバイパスされます

EQ FS (トグルスイッチ下側) - フットスイッチのEQボタンでEQのON/OFFを切り替えます

また、EQをコントロールするトグルスイッチの下にはオレンジ色のLEDがあり、EQのステータスを知らせます。EQがONになっているときは、それが用いられているかに関係なくLEDが点灯します。

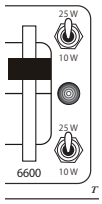
注意：80Hzと240Hzのスライダーを最大までブーストさせて、非常に高い設定のGAINやBASSと組み合わせて使用するのは極力避けて下さい。アンバランスになったりずんぐりしたひどい音になるだけでなく、スピーカーや、特にCAB CLONEの機能を使用してコンソールやプリアンプ、レコーダーに接続する際のスタジオモニターに負担をかけてしまう恐れがあります。

注意：2200Hzと6600Hzのスライダーを最大までブーストさせて、非常に高い設定のGAINやTREBLE、そして(あるいは)PRESENCEと組み合わせて使用するのは極力避けて下さい。過度なトップエンドのために真空管がマイクロフォニックな傾向になり、共鳴したり高音のノイズを発生する可能性が高まります。もしそのような状態に陥ったら、シンプルに一つまたはそれ以上のTONEコントロールまたはEQスライダーを下げて下さい(共鳴がおさまります)。

注意：繰り返しになりますが - 高い馬力を持ったパワーのある車は、その能力やタイヤ以上にスピードが出ることがあり、本機についても搭載されているプリ管の能力以上にゲインを生み出すことがあります。アンプに搭載される真空管は製造の際に厳しいテストが行われていますが、真空管はヘタったり何度も変化している間にマイクロフォニックになる傾向があります。このパワフルなコントロールを使用するときは、常識的な判断で少し冷静に抑制しながら、真空管がマイクロフォニックにならないように、最大限抑えめに設定を行って下さい。

MULTI-WATT™(マルチワット)パワー

EQスライダーのすぐ右側にあるのが、各チャンネルに割り当てられるMULTI-WATT™(マルチワット)パワー選択スイッチです。本機においては、各チャンネルごとにMESA独自のDYNA-WATT™(ダイナワット)Class AB・5極管動作の25W、またはClass AB・3極管動作の10Wのどちらかを選択出来ます。あなたのお好みにマッチする出力やフィーリング、また自然なパワークリップ(ドライブ)をフットスイッチでも選択可能となっています。

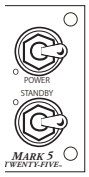


25W設定(スイッチ上側)は、配置されたパテント取得のDYNA-WATT™ Class AB・5極管配線でフルパワーとヘッドルームを実現します。この設定では、純粋なクリーンサウンドとタイトなハイゲインサウンドが得られ、その定格出力に期待する大きさを超えたパワーとヘッドルームがあります。この独創性があってユニークなMESAの回路は、パワー部で溜めてあった出力を、必要なときにアタックで一気に出して、すぐ、より"通常の"出力に戻すというものです。それから次の音が発音されるまでまた同じことを繰り返します。この瞬間的な爆発と、また戻って再度溜めるといった動作は、弾むようなダイナミックなサウンドと、素晴らしくそして緻密で、弦をヒットするときにゴムのような弾力が得られるのです。純粋な真空管のマジックです！

10W設定(スイッチ下側)ではEL84管がClass AB・3極管配線になり、よりビンテージなトーンのクリップ可能な低出力の性格を持っています。出力は小さいですが、トーンはよりスムーズでソフトなアタックとクリーミーなフィーリングでクリップします。

このパテントを持ったMESA独自の回路は何十年にも渡り世界中のプレイヤーに称賛され、1984年の今やクラシックとなったStudio 22コンボの登場以来、「Boogieは"出来る小型アンプ"である」という評判が一層高まったのです。今、この信じられないほどの音のバリエーションを持ったMARK V:25の2チャンネルプリアンプと6つのモードは、その評価を確実にし、未来の世代が楽しめるものであることを約束します。

POWER(電源)スイッチ



本機に電源を供給するためのトグルスイッチです。電源のアースがとれていることを確認して下さい。またコンセントにも適正な電圧が供給されていることを確認して下さい。

アンプを使用していない状態から演奏を開始するときは、STANDBYスイッチの項で述べている手順に従って下さい。真空管に与える問題を減らし、また真空管の寿命を延ばすことが出来ます。

STANDBY(スタンバイ)スイッチ

演奏をしていない状態からアンプを使用する際に、このトグルスイッチをSTANDBYの位置にして真空管(特にパワー管)の暖気を行います。まずPOWERスイッチをONにする前に、STANDBYスイッチがSTANDBYの位置にあることを確かめます。

コールドスタート時(演奏していない状態)からの手順：
POWERスイッチをONにしてから最低30秒間そのまま待ち、それからSTANDBYスイッチをONの位置にします。この手順によって、高電圧が冷えた真空管を直撃することによるダメージを防ぎ、また真空管の寿命を延ばすことが出来ます。。

注意：このコールドスタートからの手順は真空管の寿命と信頼性を確保するのに重要な部分です。電球のように、最も消耗するのが電源が入った瞬間(ほんの少しの、最初の数秒)です。また電球のようにもし調光器が付いていて最初の数秒のボルテージを下げられるのであれば、更に寿命を延ばすことが出来るでしょう。STANDBYスイッチはアンプの調光器のようなもので、上記のような使い方をすれば真空管(特にパワー管)の寿命を長くし、ベストなパフォーマンスを得ることが出来ます。

ここまでが本機のフロントパネル上の機能やコントロール部分についての説明です。ここからはリアパネルの機能について見ていきましょう。

リアパネル(コントロールと機能)

FUSE(ヒューズ)

外的要因による電源の過大入力またはパワー管に問題がある場合にヒューズが断線することがあります。必ずヒューズホルダーの近くに明記されているものと同じ規格のSLO-BLOタイプのフューズに交換して下さい。

パワー管のショートは大抵ヒューズが断線したことが原因で起こります。アンプの裏側に回って、このマニュアルのSTANDBYスイッチの項に書いてあるコールドスタート時からの手順に従って下さい。それからSTANDBYスイッチをON側にして、パワー管をチェックします。もしパワー管が良くない状態でONにすると、パワー管がアーク放電して(点滅して)いるのが分かります。その時はすぐにSTANBYスイッチをSTANDBY側にして、パワー管を交換します(必要があればヒューズも交換して下さい)。

STANDYBYスイッチをON側にしても特に異常が見つからなかったときは、パワー管が一時的にショートしてヒューズが飛んだ可能性があります。時によって、パワー管内での接続が一時的にショートすることがあり、しばらくはまた通常のように動作するのですが、不良と考えられますのでできるだけ早く交換して確実なパフォーマンスが得られる状態にしておいたほうが良いでしょう。またもしあまり使っていない真空管がアーク放電していたりショートしていたら、明らかに不良である真空管を交換して、もう一つはそのままにします。

もし長い間真空管を交換していない場合は、何か問題が起こればそれは全てのパワー管を交換する時期です。

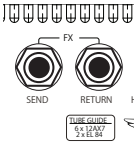
交換用の真空管は、少なくとも1ペアほどいつでも交換できるところに保管しておきましょう。

電源コネクター

付属の電源コードを接続するコネクターです。適正な電圧が供給されているコンセントから、付属の電源コードを使ってここからアンプに電源を供給します。尚、付属の電源コード以外のご使用は絶対におやめ下さい(アンプや接続機器にダメージを与えることがあります。またその際の保証は行いません)。

FX(エフェクト)ループ(シリーズ)

本機は、40年にわたって培われたハイパフォーマンスなアンプの設計とエフェクトループの知識と経験が詰め込まれています。このエフェクトループはドライ信号とシリーズ(直列)に配線されており、外部プロセッサー(エフェクター)をより良い状態で使用でき、またトーンの劣化の無いシームレスなインターフェースとなっています。つまり、ここ(プリアンプとパワー部の間)はアンプの中でも非常に繊細な部分なので、接続機器がサウンドに若干影響を及ぼす可能性があるということです。



また、外部プロセッサー(エフェクター)を製造している会社は、各社それぞれ独自の方法で回路やコントロールや機能を盛り込んでおり、それが音への影響をより複雑にしています。ですので、接続した状態でより良いパフォーマンス・サウンドを生み出せるようにやってみるしかありません。

エフェクトループに外部機器を接続するには：

1. 本機リアパネルのSENDジャックと、外部プロセッサーのインプットを短めの高品質シールドケーブルで接続します。

2. 本機リアパネルのRETURNジャックと、外部プロセッサーのアウトプットを短めの高品質シールドケーブルで接続します。

3. (レベルコントロールがあれば)外部プロセッサーのアウトプットレベルで、その機器を接続する前と後の音量のバランスを調節します(単純にSEND/RETURNのケーブルを同時に取り外して確認します)。

4. フロントパネルのMASTERコントロールを用いて2つのプリアンプ・チャンネルのSENDレベルをお好みの信号強度になるように調節します。クリーンサウンドのほうがよりダイナミックかつダイナミクスのピークがコンプレッションのかかったハイゲインのサウンドよりも速いため、注意して下さい。例えば、SEND信号が入力される外部プロセッサーのインプットLEDを視認しつつ、耳でもバランスが取れているか確認して下さい。クリーンサウンドでもし音がクリップしていないようなら、もしLEDが多少の信号強度を示していたとしても、音量的な問題はないでしょう。

注意：エフェクトループを使用する際に、音に何らかの変化が生じるのは普通です。また通常はそれが最小限であり、ほとんどの場合トップエンドがほんのわずかハイ落ちします。本機のエフェクトループはシリーズ(直列)ですので、接続する機器の品質が大きく音に影響します。本機と外部機器を接続する場合は、まず外部機器を購入する前に本機との相性を調べておくことを強くお勧めします。通常であれば、有名メーカーのプロフェッショナルラインの機器であれば全く問題ありません("プロフェッショナル"を謳っていても、サウンドに不満が残るものを経験したことはありますが)。

注意：エフェクトループには、ループ回路を動作させるためのスイッチングタイプのジャックが使われています。エフェクトループのSENDとRETURNジャックからケーブルを抜けば、エフェクトループはバイパスされます。ペダルタイプのエフェクターのほとんどはループに接続可能ですが、オーバードライブ、ディストーション、ブースター、コンプレッサーそしてワウペダルやエンベロープフィルターのようなエフェクターは、使用する楽器とアンプのフロントエンド(インプット)の間に接続する方法がベストです。これらの楽器はアンプに入る前のサウンド(信号)に変化を与えるものなので、エフェクトループに繋がないほうが良い効果を生み出します。

HEADPHONE(ヘッドホン)ジャック

本機には、スピーカーを使用しない/できない場合にアンプのサウンドを個人で楽しむためのヘッドホンアウトが装備されています。このステレオ1/4"ジャックからは、スピーカーをシミュレートした信号が供給され、それは今回搭載されているCAB CLONE™D.I.の回路によるものです。この機能は、本機の音やフィーリングを、お使いのヘッドホンに驚くほど表現豊かに伝えることが出来るのです。

CAB CLONEの回路は、アンプのサウンドをこのように素晴らしく伝え表現することが出来るのですが、その理由としては、CAB CLONEの信号がスピーカーアウトからすぐに引っ張られているからです。つまり、パワー管も含めたアンプの全て(トーン、ニュアンス、自然な真空管のコンプレッションや通常スピーカーから聞こえる弾むようなフィーリングまで)がこのジャックから引き出されるということです。確かにスピーカーキャビネットはアンプを生で演奏したときに聞こえるたくさんの要素を音として形成しますが、CAB CLONEの回路はスピーカーを通して生で演奏した経験の多くを得て素晴らしい仕事をやってのけており、スピーカーのマイキングにかける時間や手間を省いています。1本のケーブルをただ繋ぐだけです。というわけで、この素晴らしいサウンドを個人練習のためにいつでもヘッドホンアウトから得られるという本当のボーナスをあなたにお届けします。

ヘッドホンアウトの音量は各チャンネルのMASTERコントロール(そしてマルチワットの出力設定)によって決定されます(回路がパッシブでオペアンプ等は使用されていない)ので、ここで調節が必要になります。
注意：ヘッドホンはサウンドも効果(音量)も様々で、ヘッドホンアウトのパフォーマンスは使用されるヘッドホンによって決定されます。本機に使用するヘッドホンについては、いくつか違うタイプのものやブランドを試すことをお勧めします。

注意：ヘッドホンと耳との距離は、あなたのお好みのスピーカーからの距離とは明らかに異なりますので、アンプのセッティングはお使いのヘッドホンの固有の品質にベストマッチする形で調整する必要があります。

注意：内部のREVERB(リバーブ)を少しミックスの中に入れるもしくはエフェクトループの外部プロセッサーでディレイのプリセットを使用すると、スピーカーを設置する場所のエアー感や広がりを補うので、ヘッドホンアウトのサウンドがより活き活きと自然になります。

本機は、CAB CLONE™D.I.回路と、それに関連したヘッドホンアウトを搭載した最初のMESAアンプです(最後には多分なりません)。この包括的なダイレクトレコーディングかつプライベートなモニタリング機能は、アンプの価値や柔軟性そして利便性を非常に高め、本機の素晴らしいサウンドとフィーリングを深夜に(いつでも)演奏して楽しめるのと同様に、素早くそして手間の要らない、ダイレクトレコーディングの機能としても新しいオプションも備えています。

注意：ヘッドホンジャックにケーブルを接続すると、CAB CLONE D.I.のXLRバランスアウトが無効になります。ヘッドホンが回路的に許容量一杯になりサウンドが損なわれるので、ヘッドホンアウトとD.I.アウトは同時には使用できません。

注意：パッシブ回路であるCAB CLONE™にはヘッドホンアウトのボリュームコントロールが無いため、該当のチャンネルのMASTERコントロールとマルチワット™の出力選択スイッチの両方で、ヘッドホンアウトの音量を決定する必要があります。

REVERB(リバーブ)

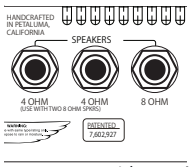
本機には、アナログ・真空管駆動の３本構成のスプリングリバーブ用に独立型チャンネルミックス・レベルコントロールが装備されています。タイプの違うサウンドには異なるブレンドレベルが必要となりますが、コントロールが独立しているため、各チャンネルのサウンドスタイルに合わせてリバーブ効果を完璧に調整することが出来ます。これらのミックスコントロールは、わずかなアンビエント効果から完全ウェットな深いリバーブサウンドまで、どのようにでも設定可能です。

一般的に言って、低いゲインのクリーンサウンドは大体昔からよりウェットなリバーブミックスのレベルになります。また低、中または少しゲインが高めの単音の演奏にも、ウェットめ、深めのリバーブサウンドが効果的で、ソロ演奏時により音が立体的になります。高めゲインのクランチリズムサウンドには、普通リバーブはあまりかけませんが、それは素早いアタックとカットするようなスタッカートがきいた演奏をすることが多く、あまりリバーブ成分が多いと音のタイトさにあまり良い影響を与えないからです。しかしながら音楽にルールはなく、あなた自身の必要性に合わせてリバーブの量を決めて演奏して頂ければと思います。

コントロールの配置ですが、アンプのフロントパネル側からリアパネルを覗き込んだ時に、チャンネル１のリバーブミックスコントロールが左側、チャンネル2が右側に位置しています。このレイアウトは、アンプのフロント側からリバーブのレベルを調節する際に、一番問題がないと多くのプレイヤーが感じている結果として、そうなりました。
また、外部プロセッサー(エフェクター)を製造している会社は、各社それぞれ独自の方法で回路やコントロールや機能を盛り込んでおり、それが音への影響をより複雑にしています。ですので、接続した状態でより良いパフォーマンス・サウンドを生み出せるようにやってみるしかありません。

SPEAKERS (スピーカーアウトプットジャック)

本機のスピーカーアウトプットジャックは、2つの4Ωスピーカージャックと１つの8Ωジャックから選択します。ほとんどのMESAのスピーカーキャビネットは、カスタム品を除いては(もしくは以前から所有されているキャビネットの外部モディファイ品を除いては)標準の8Ω配線で製造されています。１つの8Ωキャビは8Ωのアウトプットと接続します。2つのMESA 8Ωキャビを使用するときは、まず１つを4Ωアウトに接続して、連鎖する2つ目のキャビは、１つ目のキャビのパラレルアウトから2つ目のキャビのINPUTジャックへ接続します(MESAのキャビネットはこの目的のためにパラレルジャックを装備しています)。もし2つの古いMESA 8Ωキャビを使用するとき(または他のブランドの8Ωキャビを2つ使用するとき)は、それぞれの8Ωキャビを4Ωスピーカーアウトへ接続します。この接続方法によりインピーダンスのベストマッチングが可能になり、最適なパフォーマンスを実現します。もし4Ωキャビを１つ使用するときは、それを4Ωスピーカーアウトに接続します。これは正確なインピーダンスのマッチングではあるのですが、8Ωキャビ１台を使用した時より少しアタックが柔らかくなることがあります。



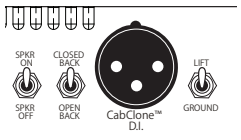
もし本機と他ブランドのキャビを繋ぐときは、キャビのインピーダンス(抵抗値)をしっかり確認して、正しく安全にアンプと接続しなければなりません。間違った繋ぎ方をすると真空管の寿命を縮め、アウトプットトランスに過度の負荷をかけてしまい、ダメージを与える危険性があります。間違ったインピーダンスのマッチングによる製品のダメージは保証対象外となりますので、十分注意して下さい。また、お使いのスピーカーキャビネットがアンプのスピーカーアウトに正しく接続されているか常に確認して下さい。このマニュアルに後述されている"スピーカー・インピーダンス　マッチング/接続ガイド"をよくお読み下さい。どんなに通常でないスピーカーのセッティングを行っても、いくつかのスピーカー接続のコツを使えば、最適かつ安全なパフォーマンスを得ることが出来ます。

注意：我々は、可能であれば8Ω(インピーダンス負荷の)キャビを使うことをお勧めしますが、理由は最適なインピーダンスのマッチングとベストなパフォーマンスが得られると認識しているからです。他のインピーダンスでももちろん問題ありませんが、パワー(ヘッドルーム)と迫力あるアタック、甘い弾けるようなトップエンドとタイトなローエンドは、アンプと8Ω負荷のキャビとのコンビネーションでベストなものが得られると考えます。

注意：役立つヒントからの繰り返しになりますが、スピーカーインピーダンスは、本機のパワー部のサウンドに影響を与えます(2つの異なるモードの切り替え時も)。8Ωスピーカーと8Ωスピーカーアウトの接続が最もバランスが取れたパフォーマンスを発揮できるのでお勧めします。また異なる負荷のコンビネーションを安全に試す方法がありますが、それは高めの負荷から低めの負荷に接続する方法です。例えば8Ωスピーカーを4オームのスピーカーアウトに接続したり、16Ωのスピーカーを8オームのスピーカーアウトに接続したりといった接続方法です。この方法であればアンプの負荷にダメージを与えることなく、技術的なミスマッチを狙ったコンビネーションとなり、必要に応じたユニークなレスポンスが得られます。唯一のペナルティとしては、ミスマッチ負荷の状況はパワー管の寿命を少しばかり速く縮めてしまうということと、アンプの最大のヘッドルーム(フルパワー出力)を得られないということです。また、低めから高めに接続するインピーダンスのミスマッチは行わないで下さい(例：2オーム負荷のスピーカーを4Ωスピーカーアウトに接続する)。この方法はアウトプットトランスに負荷がかかり、アンプにダメージを及ぼす恐れがあります。

CabClone(キャブクローン)™　D.I.

このマニュアルの最初の概要の部分で述べたように、本機には1つ(唯一ではないかも知れません)、MESAのリアパネル史上最もクールな機能が搭載されています。それが、搭載型CAB CLONE D.I.そしてキャビネットシミュレーター機能です。この搭載型のダイレクトレコーディング機能は、本機の素晴らしいサウンドとフィーリングを捕えて、スピーカーのマイキングを行うことなくダイレクトに、コンソールやコンバーター、またはレコーダーへ送ることが出来るというものです。実際、多くの著名なプロデューサーやエンジニア、またプレイヤー達がこの機能を賞賛しています。



既に高い評価を受けている独立型のCAB CLONE™ D.I.からの機能はそのままで、スピーカー補正が行われたD.I.XLRバランスアウト(とヘッドホンアウト)は、スピーカーアウトからの信号を捉えて、ダイレクトに信号に変換するという素晴らしい仕事を行います。リアパネルにある4つの各部分は、ライブスピーカーを同時に使うか使わないかも選択できるので、必要であればダイレクト信号とマイキングされたサウンドをブレンドすることも可能です。

CAB CLONEのセクションは、以下の各部分で成り立っています：

- **SPKR ON/SPKR OFF (スピーカーON/スピーカーOFF)** - スピーカーのステータス(スピーカーを同時に使うかどうか)を選択します
- **CLOSED BACK/OPEN BACK (クローズドバック/オープンバック)** - キャビネットのスタイルを2種類から選択します
- **CabClone™　D.I.** - XLRバランスD.I.アウトの端子です
- **LIFT/GROUND(リフト/グラウンド)** - LIFT側にすると、バランスアウトの端子のPin 1がフローティング状態になります

このコントロール群の配列は、おそらく最も効果的でどのMESAアンプにも搭載されるべき機能で成り立っており、機能的に、そして演奏時の楽しみとしての両方の可能性を広げるものです。MARK FIVE: 25は、我々のアンプの中でも一番最初にこのパワフルなツールを装備したものとなりましたが、信頼性やトーンを犠牲にすることなく、ライブユースまたはレコーディングにおいてスピーディーにかつ便利に使用できるものとなっています。それは間違いなくこの小さなダイナモのプロユースなポテンシャルを高め、MESAの新しい時代の先駆けのアンプとして、そのカテゴリーのアンプの基準を引き上げるとともにより高みに君臨することでしょう。

SPKR ON/SPKR OFF (スピーカーON/スピーカーOFF)

この小さいトグルスイッチは、CAB CLONEを使って(アンプからの出音無しに)"静かに"レコーディングを行う際に、スピーカーアウトをミュートすることが出来ます。ライブスピーカーもCAB CLONEのXLRダイレクトアウトも両方使いたい場合はSPKR ON、またはD.I.アウトのみを使いたい場合はSPKR OFFを選択して下さい。また、このスイッチをミュートスイッチとして使うことも出来ます(リアパネルにあるのと、フロントパネルにはそのためのSTANDBYスイッチもあるので使う頻度は少ないと思われますが)。

注意：重要です！ SPKR OFFのスイッチ位置にある際は、自動的に負荷抵抗器がスピーカーアウトと接続され、アウトプットトランスへのダメージを防ぎ、またXLR D.I.アウトにて(スピーカーが繋がっていない)サイレントレコーディングを行うことが出来ます。SPKR ONを選択すると、内部負荷が無効になり信号がスピーカーアウトに接続されます。スピーカーを繋いでいない状態で、SPKR ONにスイッチを切り替えるのは絶対におやめ下さい！　アンプにダメージを与える恐れがあり、またその場合は保証対象外となりますので十分ご注意下さい！

注意：覚えておいて頂きたいこととして、もしアンプの電源スイッチやSTANBYスイッチ、GAINやMASTERコントロール(エフェクトループ内のエフェクターのインプット/アウトプットボリュームも同様です)がONになっているのに音が出ない場合は、リアパネルの右端にあるCAB CLONEセクションのSPKR ON/SPKR OFFスイッチをチェックして、トグルスイッチがSPKR ON側になっているかを確認して下さい。運搬中やセッティング中にスイッチに何かがぶつかって、スイッチが切り替わってしまっているかも知れません。

CLOSED BACK/OPEN BACK (クローズドバック/オープンバック)

搭載型のCabClone™　D.I.は、MESAが45年に渡って世界中のスピーカーのトップブランドと共同開発してきたカスタムスピーカーや、またそれを載せるスピーカーキャビネットをデザインしてきた蓄積から作り出した、二つのクラシックな"キャビネットをシミュレートした"サウンドを選択出来ます。このCAB CLONEの"バーチャル・キャビネット"は、異なるスピーカーやゲインの範囲、また異なる楽器やピックアップに対応したダイレクト回路のEQのレスポンスに対応することが出来ます。その選択肢の音のレンジですが、一つはトップエンドが強調されてブライトでオープンなクリーンサウンド(OPEN BACK)、そしてよりコンプレッション感のあるサウンドで高次倍音が抑えられ、温かみがあり、歌うような単音のサウンドまたは厚いハイゲインのリズムサウンド(CLOSED BACK)となっています。

クリーンサウンドとオーバードライブサウンドは、これらの異なるキャビネットのタイプをそのサウンドに必要とするので、CAB CLONEでダイレクトレコーディングをする際は二つのボイシングが演奏するサウンドにマッチするか試してみる必要があります。スイッチ下側のOPEN BACKはトップエンドが取り出され、高次倍音が多くよりオープンな、立体的で輝くようなサウンドが特徴です。このスイッチ位置は、クリーンサウンドやブライトでアタックの速いオーバードライブの掛かったリズムサウンドに最適です。

スイッチ上側のCLOSED BACKの位置は、"オープンなサウンド"とは対照的にトップエンドが丸くなりコンプレッション感があり、より高めのゲインのフォーカスがあたり、不必要な"うなり"を取り除きます。また、クラシックなスピーカードライバーでオーバードライブとディストーションの素晴らしい音の作り出される仕組みである、急な周波数のロールオフを再現しています。このロールオフのないギターのオーバードライブサウンドは、本当に薄っぺらでサウンドが良くなく、我々は良いオーバードライブサウンドの一部としてそのスピーカーの効果を認識していました。もしHI-FIのスピーカーでギターアンプを鳴らしたり、スピーカー補正なしでダイレクトアウトのサウンドを聞いたりしたことがあれば、信号のロールオフがトーンにとってどれほど重要かをご存じかと思います！

ライブスピーカーのマイキングサウンドとCAB CLONEのダイレクト信号をミックスするときは、キャビのボイシングもそれぞれ試して、ミキシングの際に反対のレスポンスのサウンドも混ぜると良いかも知れません。

この二つのキャビのボイシングを使用すれば、CAB CLONEのレスポンスはほとんどのサウンドに合わせて調整することが出来ます。ライブスピーカーを同時に使用するときは、使用するスピーカーが選択したキャビのサウンドに影響を及ぼすかも知れません。使用するキャビの本来のキャラクターによりますが、より敏感にダイナミックになったり、またはサウンドがよりブライトになることがあります。

注意：CAB CLONEの回路は、スピーカーアウトから使用されるどんなスピーカー(抵抗)にも給電を行うので、(ダイナミクスと周波数レスポンスの両面で)アンプのパワー部に影響を受けます。

CabClone™　D.I.

このオス型の3ピンXLRアウトプットは、バランス信号をダイレクトにコンソールやプリアンプ、レコーダーに供給します。(必要な長さの)標準3ピンXLRマイクケーブルを使用して、お使いの機器に接続して下さい。次の選択としては、CAB CLONEのスピーカー補正された信号のみでレコーディングを行うか、または左側にあるSPKR ON/SPKR OFFミニトグルスイッチを切り替えてライブスピーカーのサウンドをミックスするかどうかです。

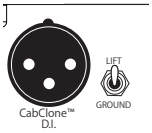
CAB CLONEの回路はパッシブで、特定のアウトプットレベルコントロールが存在しないため、各チャンネルのMASTERコントロールとマルチワット出力選択スイッチで、CAB CLONEのアウトプットのSENDレベルの強度(音量)を決定します。

注意：本機でダイレクトレコーディングを行う際は、始める前にまずSTANDBYスイッチがSTANDBYの位置にあるか、そして各チャンネルのMASTERコントロールが"0"の位置にあるかどうかを毎回必ずチェックして下さい。こうすることで、コンソールやプレイバックモニターのフェーダー(INPUTアッテネーター)が既に上がっていたり上がりすぎていた場合の急激な音量のアップ等を防ぐことが出来ます。

また、同様の急な音量アップを避けるためには、コンソールやプリアンプ/レコーダーのINPUTトリム(コントロール)もゼロにしておいたほうが良いでしょう。

LIFT/GROUND(リフト/グラウンド)

このスイッチでCAB CLONEのバランスD.I.アウトのXLR端子(Pin 1)のグラウンド(アース)を回路またグラウンドシャーシから切り離すと(リフト)、多くの場合(全てではありません)グラウンドループによって起こるハムノイズを除去することが出来ます。サイレントレコーディング環境では、どんな小さいノイズも目立ってしまいますが、グラウンドループは最もよくある(そして厄介な)ハムノイズやバズの原因です。この問題をいつでも解決できる万能薬ではありませんが、それでもノイズフロアには有効であり、少なくともハムノイズの主な原因を排除出来ます。



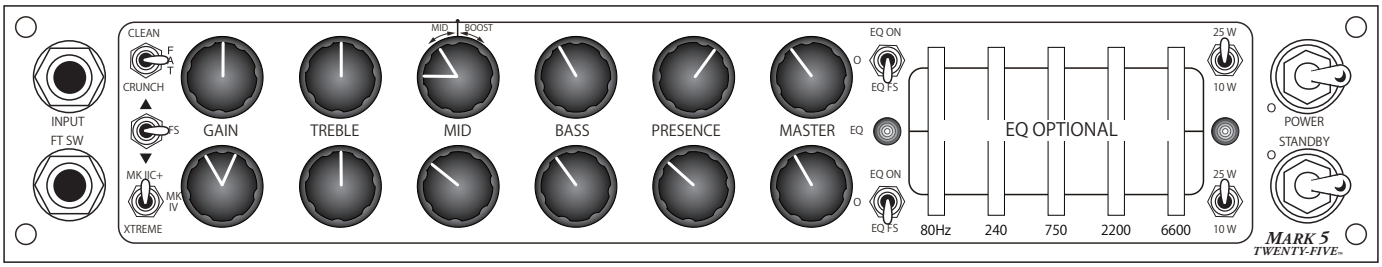
これで本機についての細かい説明が終わりました。あとは、あなたがこのパワフルなツールをあなたの音楽の中で使用し、未知のサウンドを切り開いていく番です。我々はあなたが経験したことがないようなサウンドを体験し、またそれを新しくエキサイティングなものとして表現されることを願ってやみません。このマニュアルのコントロールや機能について学べば、きっとトーンについての言語(知識)を流暢に確かなものにし、また自由に自信を持って欲しいサウンドを探し求めることが出来るでしょう。

ここにいる我々MESA/Boogieのスタッフ全員より、"MESAファミリーにようこそ、そしてあなたが何年にも渡ってこの新しい製品からインスピレーションや演奏する楽しみを享受されることを心から望みます"。

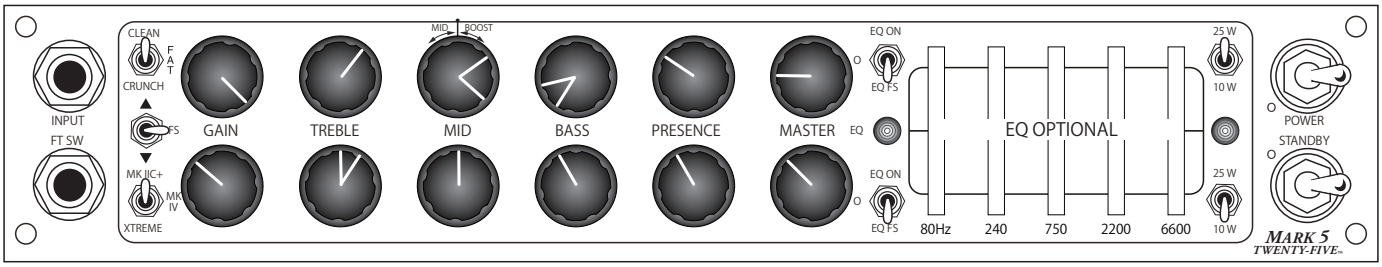
NOTES

サンプル・セッティング

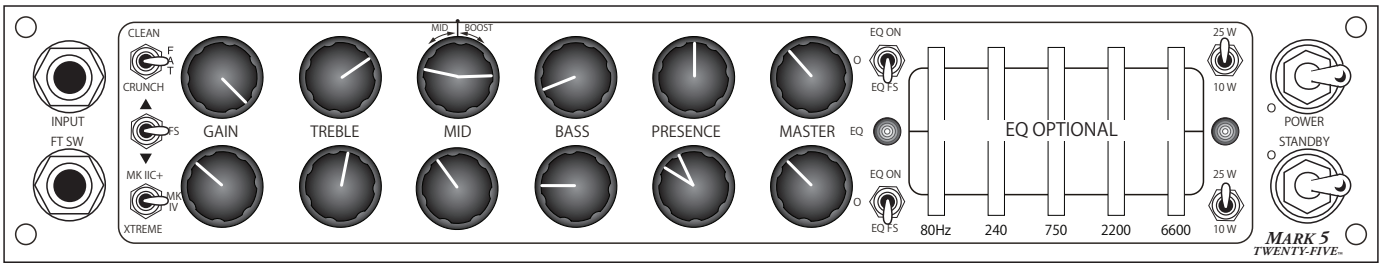
FAT CLEAN / II-C+ LEAD



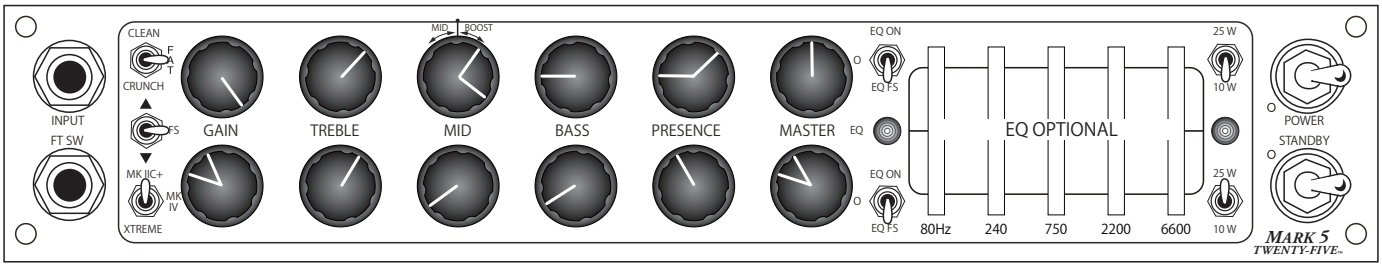
TIGHT CLIPPED / II-C+ BLUES LEAD



FAT CLIPPED CLEAN / MARK IV WARM BLUES

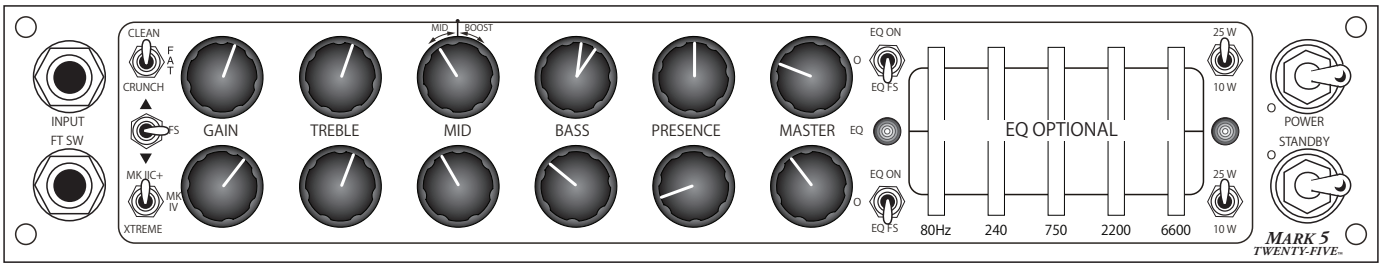


FAT SOLO / SKINNY II-C+ RHYTHM

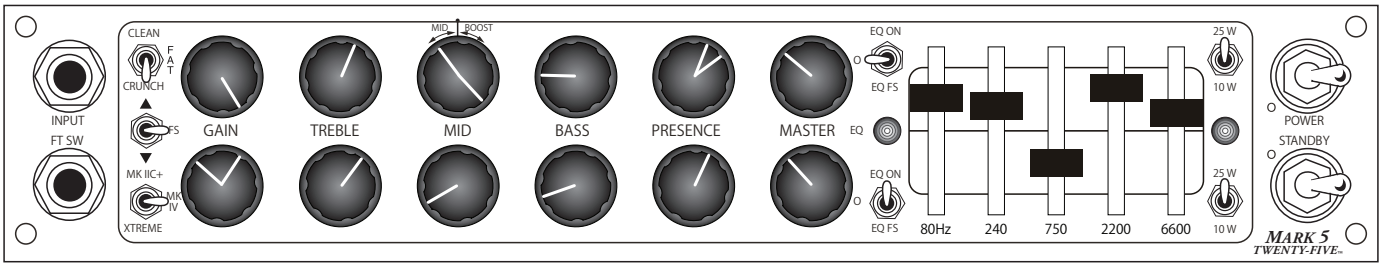


サンプル・セッティング

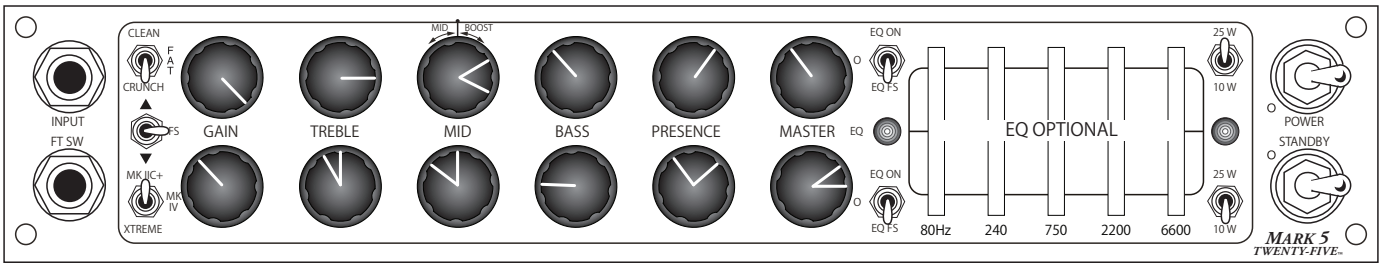
II-C+ CLEAN / II-C+ SOARING LEAD



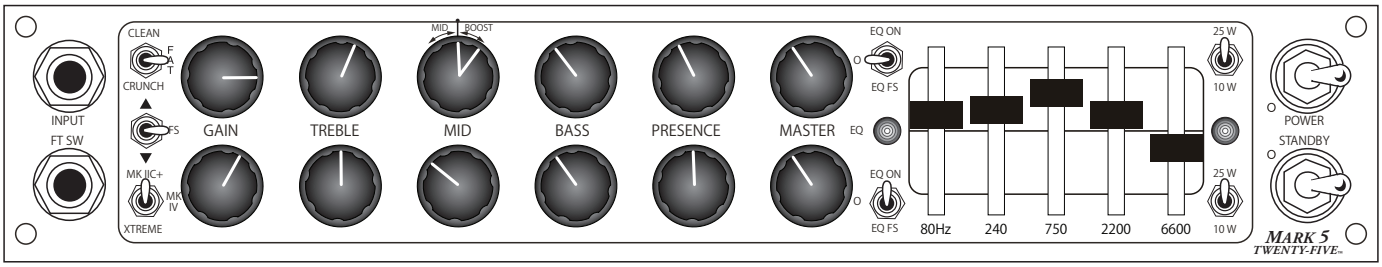
CRUNCH SOLO / MARK IV TIGHT RHYTHM



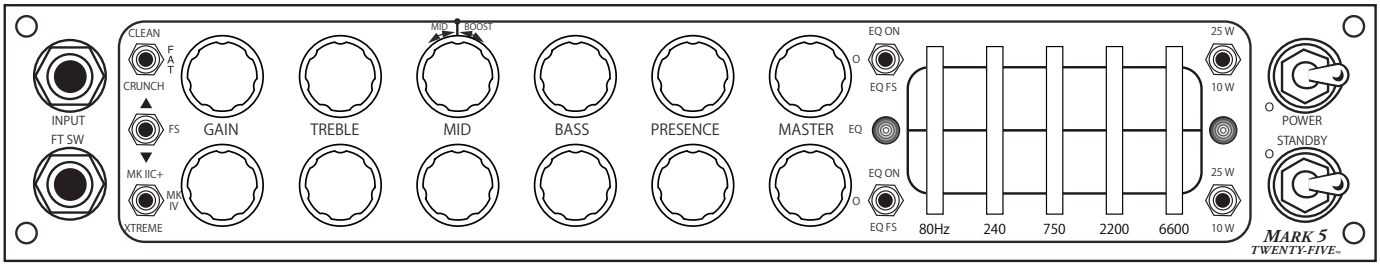
CRUNCH CLASSIC / II-C+ CLASSIC ROCK

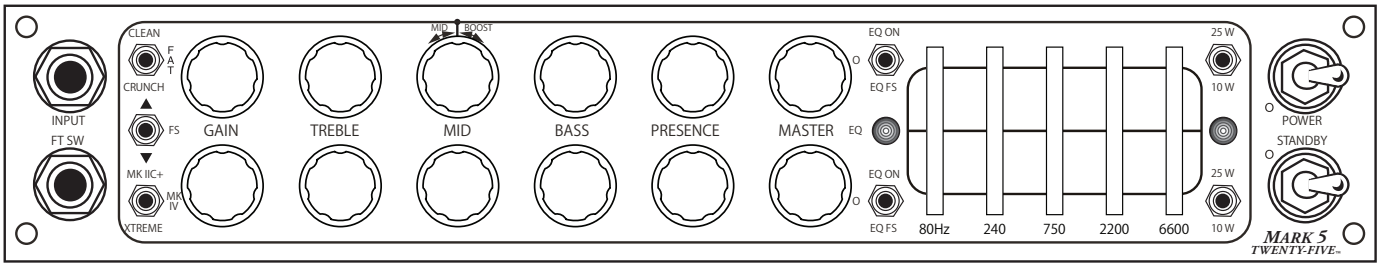


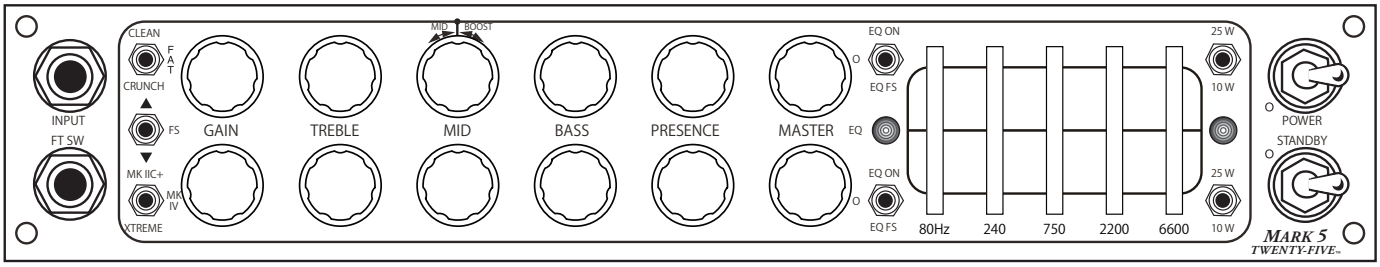
PUNCH RHYTHM / MID-BUMP LEAD

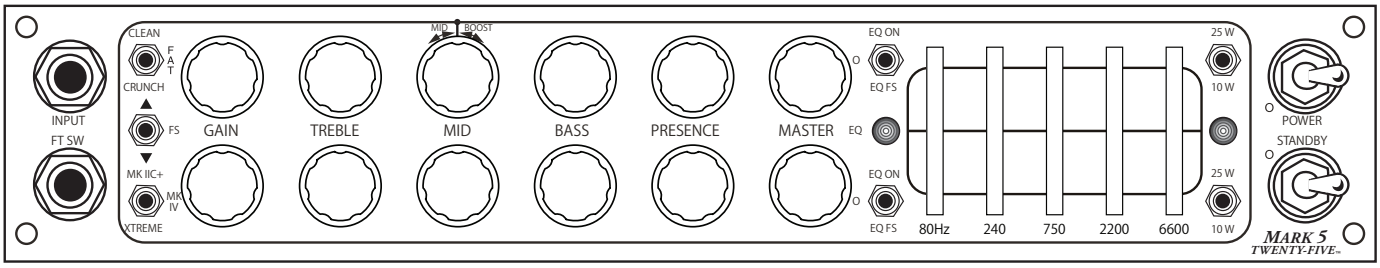


ユーザー・セッティング・テンプレート

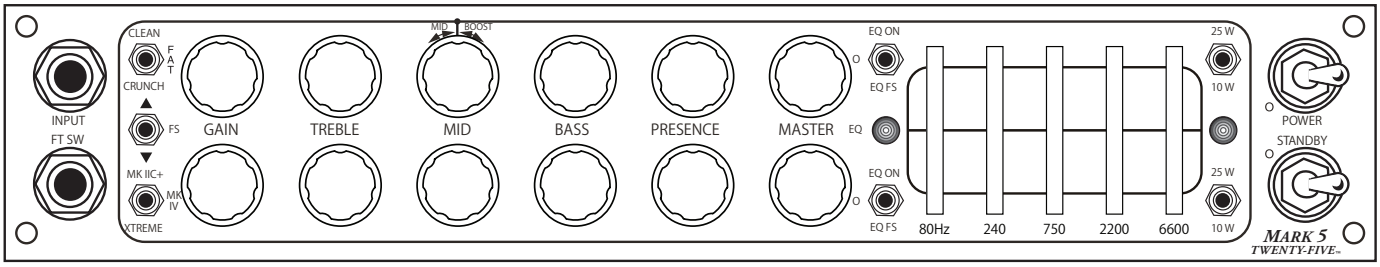


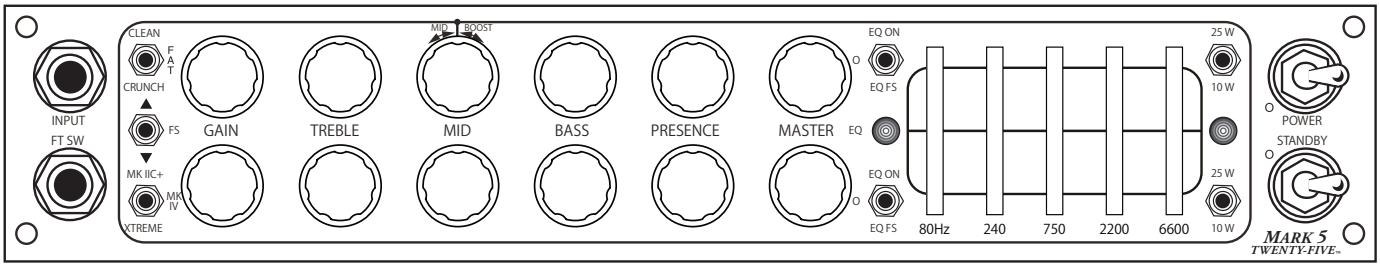


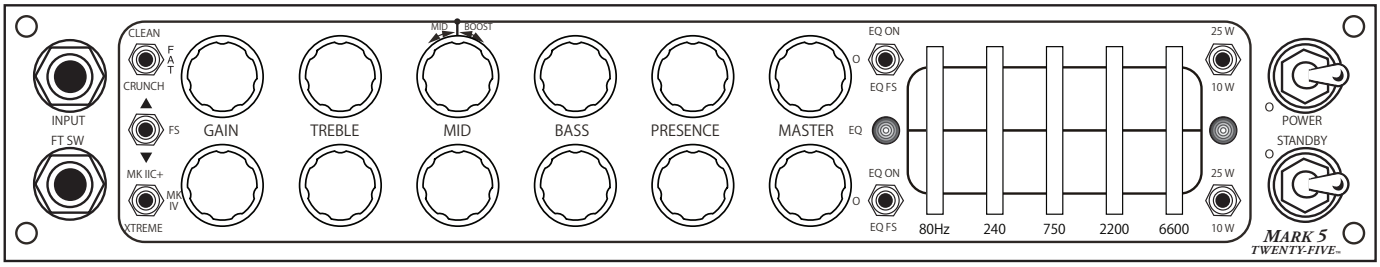


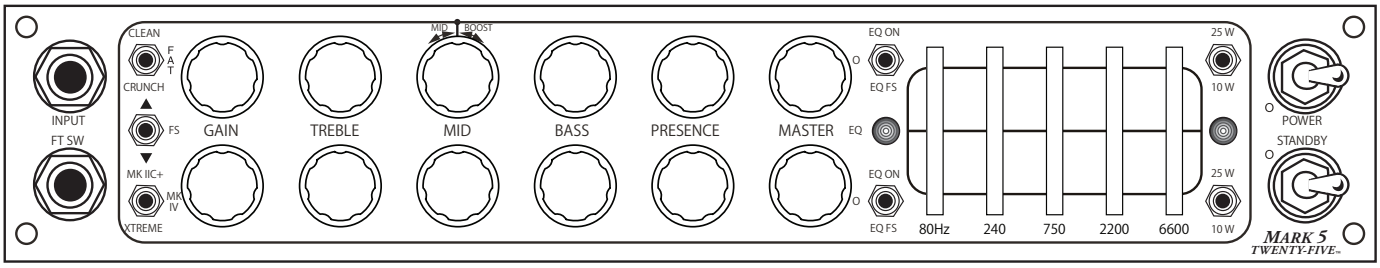


ユーザー・セッティング・テンプレート









真空管のノイズについて：

状況によって、真空管のノイズを経験したことがあるでしょう。危険性があるというわけではなく、トーンに影響するものです。真空管の交換は電球を変えるようなもので必ずしも技術者に依頼しなければならないというものではなく、実際にやってみるとそう難しいことではありません。(ですが、やはり慣れていない方には楽器店に相談の上、技術者による交換を依頼することをお勧めします)。

真空管を交換する際に最初に我々がお勧めしたいのは、アンプを安定した台の上に載せて頂くことです(そうすれば腰を曲げることなくアンプ内部の真空管を確認出来ます)。また、真空管を交換する際に照明が当たってチューブソケットがはっきり見えます。アンプを使用した後で真空管に触る際は、大変高温になっていますので十分に注意して下さい！　まだ熱を感じる場合は、布きれ等を使って真空管を持つようにします。また真空管のシルバーの先端の下のガラス部分はあまり熱を帯びていないのでそこを持った方が交換しやすいはずです。
また真空管をソケットに固定する際も、外す際と同様に優しく持ちます。

パワー管の問題を診断する：

パワー管の問題は主に二つあります：ショートか、ノイズです。たいていそのどちらかの問題に陥るのですが、診断と処理は通常シンプルです。

フューズが飛ぶときは、軽度か重度かに関わらずたいていがパワー管の故障が原因です。軽度の場合は、電子流が制御格子を超えて、過電流が流れるというものです。音が歪んだり少しハムノイズが聞こえてきたりする場合は、アンプをSTANDBYにしてすぐパワー管をチェックします(赤くなっているかを確認します)。ショートしてる管がバイアスを下げるためたいていペアの二つが熱くまた発光していますが、一つだけが熱く発光している場合は、それだけが原因です。数分間赤くなってなければ、他の二つは問題ないでしょう。

この場合は物理的に真空管の内部でショートは起こらず(電子流が暴れているだけです)、しばらくSTANDBYにしてそれからONに戻せば、一時的には問題はなくなっているはずです。それからまた真空管をチェックして、再び同じ問題が起こるようなら、問題のある真空管がオーバーヒートを起こすので特定することが出来ます。

重度の故障の場合はあまり問題は簡単ではなく、最悪の場合は真空管の内部でショートが起こり、スピーカーから大音量のノイズが発生します。その場合はただちにアンプをSTANDBYの状態にして下さい(おそらくそれまでの間にフューズが飛びます)。またそのようなショートの場合は、真空管内部の部品同士が接触し、故障の状態になります。パワー管の交換と、SLO-BLOタイプのフューズの交換を行い、このマニュアルに書いてある方法で再びアンプの電源を入れます。

真空管のノイズ：

ノイズはしばしば真空管内の汚れが原因だったりしますが、真空管のガラスを指で軽く叩いてみると、ノイズの質が変化して音が聞こえたりします。しかしながら、12AX7を指で軽く叩いたときにスピーカーから何らかのノイズが聞こえるのは通常の状態です。INPUTジャックに近い管の音は大きく聞こえるもので、何故なら二つ目の12AX7管がアウトプットを増幅しているからです。

パワー管は通常指で叩いても常に静かなはずです。叩いた時にパチパチやシーッと音を立てるときは、おそらく問題があります。パワー管のノイズを確認するには、アンプをSTANDBY状態にして、問題のあると思われるパワー管をソケットから抜いて、また戻してみます。
ハムノイズが聞こえるようなときは、プッシュ・プルの真空管マッチングバランスが崩れています。問題があると思われる真空管を突き止めるときはいつも、POWERスイッチやSTANDBYスイッチを常に片手で触れながら、トラブルが発生したときにすぐにOFFに出来るようにしておきます。

もし問題がどこにあるか分からないときは、疑わしいものだけを新品の真空管に交換する方法をお勧めします。チューブ交換の方法については、前述の説明を参考にして下さい。同じチェックをするだけなら、技術者にアンプを送って真空管交換を依頼するよりもご自分でするほうが手間ではないかも知れません(それでもやはり自身での交換に不安がある場合は、最寄りの楽器店にご相談下さい)。

プリアンプの真空管の問題を診断する：

チューブ仕様のアンプを使用したことがあれば、プリアンプの真空管ノイズを経験したことがあるかも知れません。しかし、これがすぐに故障に繋がるというわけではありませんので、安心して下さい。この不安を解消する一番の近道は、真空管を交換することです。

最初に、なるべくアンプのパフォーマンスを落とさないためにも、少なくともいくつかの予備のプリ管を準備しておくのが良いでしょう。ちょっとしたプリ管の問題というのは、主に二つのカテゴリーに分けられます：ノイズと、マイクロフォニックノイズです。ノイズの種類は、パチパチ音であったり、ホワイトノイズ、ヒスノイズ、ハムノイズ等があります。マイクロフォニックノイズとは、ゲインや音量を大きくしたときに、金属的かつ周波数の高いサウンドでハウリングを起こすものです。マイクロフォニックノイズは、楽器側の音量を絞ったり、楽器をアンプから離すことでハウリングが止まるかどうかで、問題を分けることが出来ます。
(ハウリングがピックアップのフィードバックによるものであれば、これでハウリングが止まるからです)。また機器の振動やショックによっても引き起こされます("マイクロフォンを叩く"というのが、マイクロフォニックノイズの語源になっています)。

１つのモードやチャンネルのみでプリ管の問題が起こるのであれば、その問題を解決する最善の方法は真空管の交換です。反対に、特定のモードやチャンネルにトラブルの原因が絞れない場合は、全てのモードやチャンネルに関わっている、プリ管に問題があるのかも知れません。
あるいは、可能性は低いですが、ドライバー真空管に問題があるかも知れませんので、特定のモードやチャンネルに特定できない場合は、ドライバー管を交換する方法もあります。ドライバー管の問題は、一般的にパチパチ音やハムノイズがアンプの出力から聞こえる、または全てのモードでアンプの出力が弱くなるという症状となって現れます。
たまに弱ったドライバー管がアンプのサウンドをフラットかつ生気のないものにすることがありますが、ごくまれであるため、同様の問題が生じた場合はやはりパワー管の劣化が原因と考えられます。

トラブルの原因が特定できない場合に、一番早くて確実な方法は、、プリ管を同時に交換することです(その後どこに問題があるか分かったときのために、外した真空管を保管しておいて下さい)。INPUTジャックに近い真空管のサウンドがノイズっぽく感じられるかも知れませんが、それはその真空管が一番最初に信号が通る真空管であり、その後で出力が他の真空管により増幅されていくからです。その理由から、"インプット・ソケット"(通常V1と表示されています)に装着する真空管は最もノイズが少ない物を選びます。
プリアンプの後段 -パワー管の直前- の真空管にノイズがなければ、ほとんど問題は発生しません。このアンプには最も適正な真空管が装着されていますので、真空管を交換する場合は全部一度に外すのではなく、一つ一つ外して取り付けるようにして下さい。また問題の無かった真空管を戻す時は、必ず元々装着してあったソケットに戻すようにして下さい。また真空管を交換するときは、アンプの電源をSTAND-BYにしてから行って下さい(そうすることで、スピーカーから大きなノイズが出ることを防げます。
そうしないとたとえゆっくり真空管を取り外したとしてもノイズが発生します)。

もしアンプを運搬する必要がある場合は、アンプ本体(シャーシ)を新聞紙等で包んでください。また包んだアンプ本体と段ボール箱に間に、15センチ程の隙間("クラッシュ・スペース")を空けて下さい。エアーパッキン("プチプチ")等で包むのも良いですが、発泡スチロールはなるべく使用しないで下さい
(運搬中に発泡スチロールが擦れて、その粉がアンプ内部に入り込み、電子部品に損傷を与える可能性があります)。

プリアンプ管は一般的には劣化することはありませんので、気分的な交換はあまり良いアイデアとは言えません。もし交換しても結果が変わらない場合は、元に戻してください。まれなことではありますが、もしトラブルシューティングの手順の中で損傷していることが分かった場合は、適切に交換を行って下さい。

注意：プリ管を指で軽く叩いた時に金属っぽい音がするのは異常ではありません。真空管からパチパチ音等が出力されない限りは、通常通りに使用することができます。

スピーカー・インピーダンス・マッチングと接続ガイド:

インピーダンス:

スピーカー接続において最も基本的で重要なのは、位相を正相にする事です。これにより素晴らしい音を出力する事が可能になります。これはそんなに難しい事ではありません。負荷についていくつかの事と、最適な負荷でスピーカーを接続する事を理解すれば良いのです。

MESA/Boogie アンプは、４オームと８オームを扱う事が出来ます。真空管アンプは、４オーム未満でドライブする事はしないで下さい。;これを行うと、出力トランスを損傷する可能性があります。２オームを扱う事の出来る数少ないアンプ（例えばMESA（メサ）のBass 400+）であれば大丈夫です。反対に高い抵抗値（例えば１６オーム等）の場合はアンプを傷める事はありません。

ミス・マッチング:

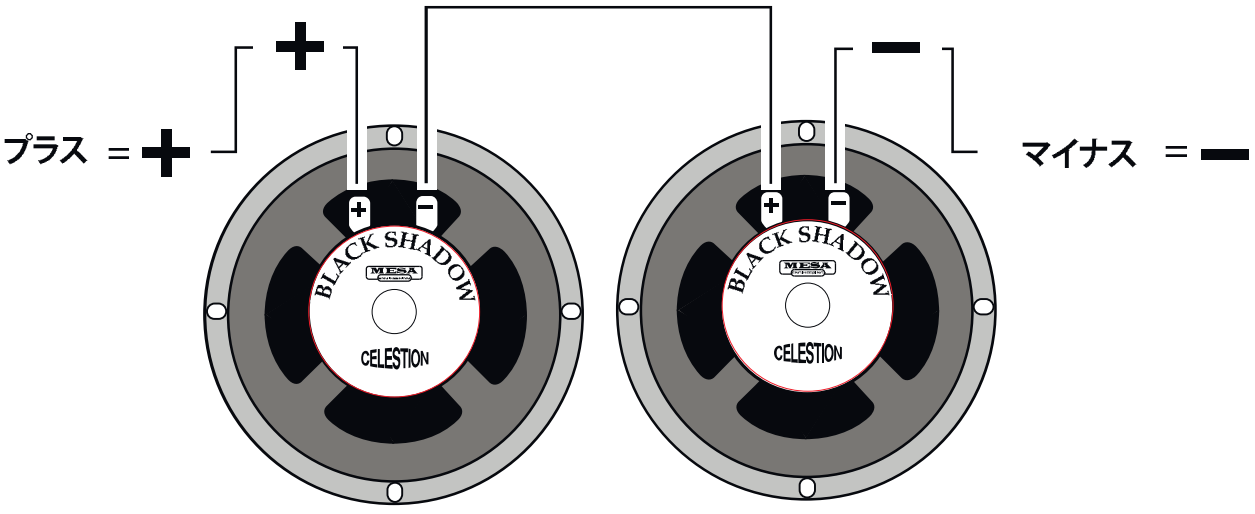
高い抵抗値（例えば８オーム出力を16オームのキャビネットに接続）でドライブすると、少しフィーリングが異なり、レスポンスが際立った感じになります。少しのミス・マッチであれば、トーンが若干暗く、出力とアタックが少し弱く、レスポンスが少し速くなる程度です。スピーカー・キャビネットが複数になると、ミスマッチは選択肢の１つになるほどです。

キャビネット・インピーダンスの算出方法:

お持ちのスピーカーが１台の場合は、そのスピーカーのインピーダンスとアンプのインピーダンスを合わせて下さい。複数のスピーカーをお持ちの場合は、アンプにかかる負荷を計算しなければなりません。複数のスピーカーの接続方法は次の３種類になります。:

シリーズ（直列）:

スピーカーを直列に接続した場合、それぞれのスピーカーのインピーダンスを単純に加算します。例えば、８オームのスピーカーを２台直列に接続した場合は、16オームになります。



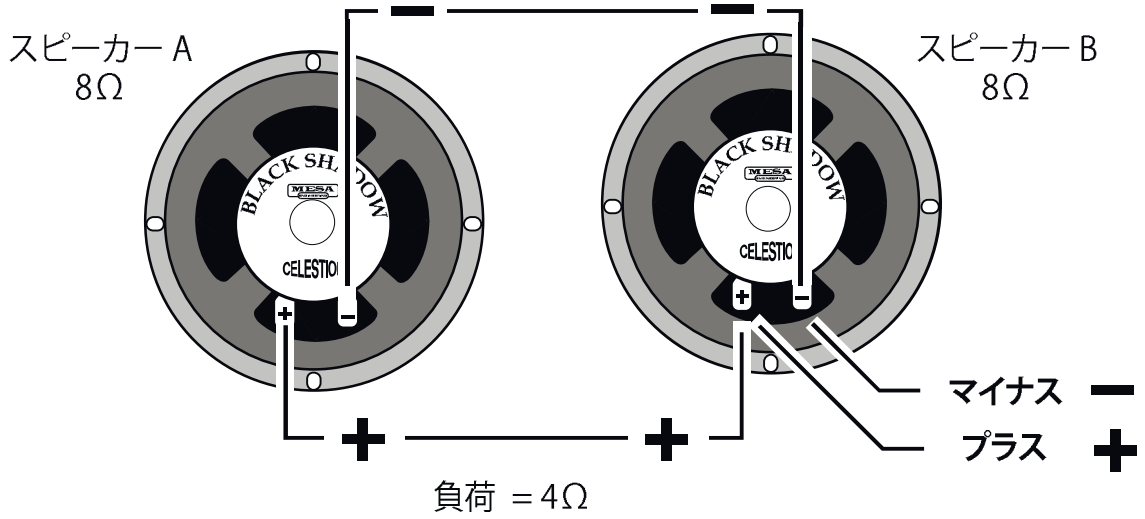
スピーカー A＝8Ω　　スピーカー B＝8Ω

シリーズ（直列）: スピーカーAのマイナス端子と
スピーカーBのプラス端子を接続

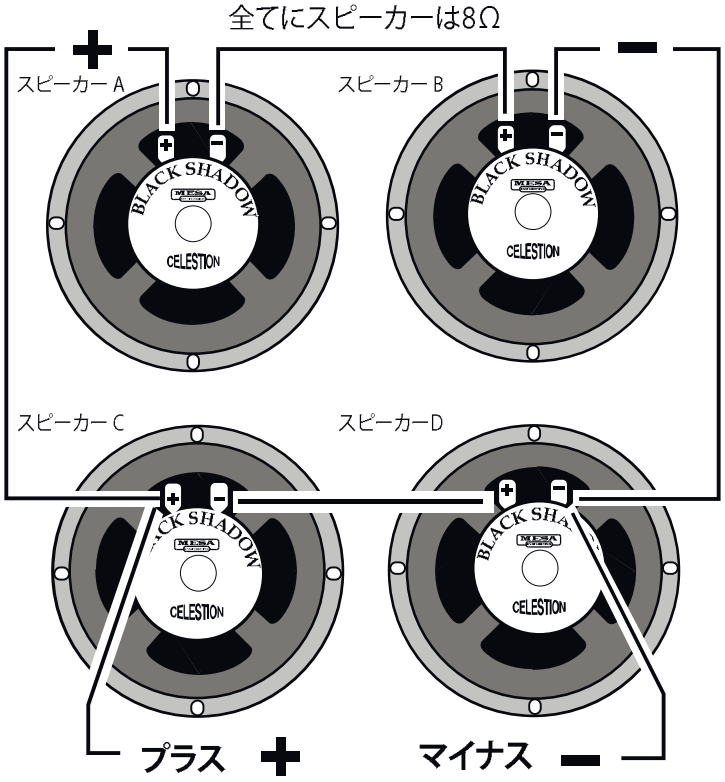
スピーカー・インピーダンス・マッチングと接続ガイド（続き）：

パラレル（並列）：

スピーカーを並列に接続した場合、スピーカーの抵抗値は下がります。２台の８オーム・スピーカーを並列に接続した場合、負荷は4オームになります。接続するスピーカーが全て同じ抵抗値であれば計算は簡単ですが、異なる抵抗値のスピーカー（例えば、8オームと4オーム、16オームと8オーム等）を並列に接続する場合は、少しややこしくなります。計算式は、それぞれの抵抗値をかけ算した数値を、それぞれの抵抗値を足し算した数値で割ります。例えば８オームと４オームであれば、8×4÷（8+4）＝2.6666オームになります。パラレル（並列）：スピーカーAのプラス端子とスピーカーBのプラス端子、スピーカーAのマイナス端子とスピーカーBのマイナス端子をそれぞれ接続。



シリーズ（直列）とパラレル（並列）の組み合わせ：



これは、２セットの直列接続したスピーカーを並列に接続する組み合わせです。ここで重要なのは、全てのスピーカーの合成抵抗値が低くなり過ぎてアンプに負担をかけない様にする事です。

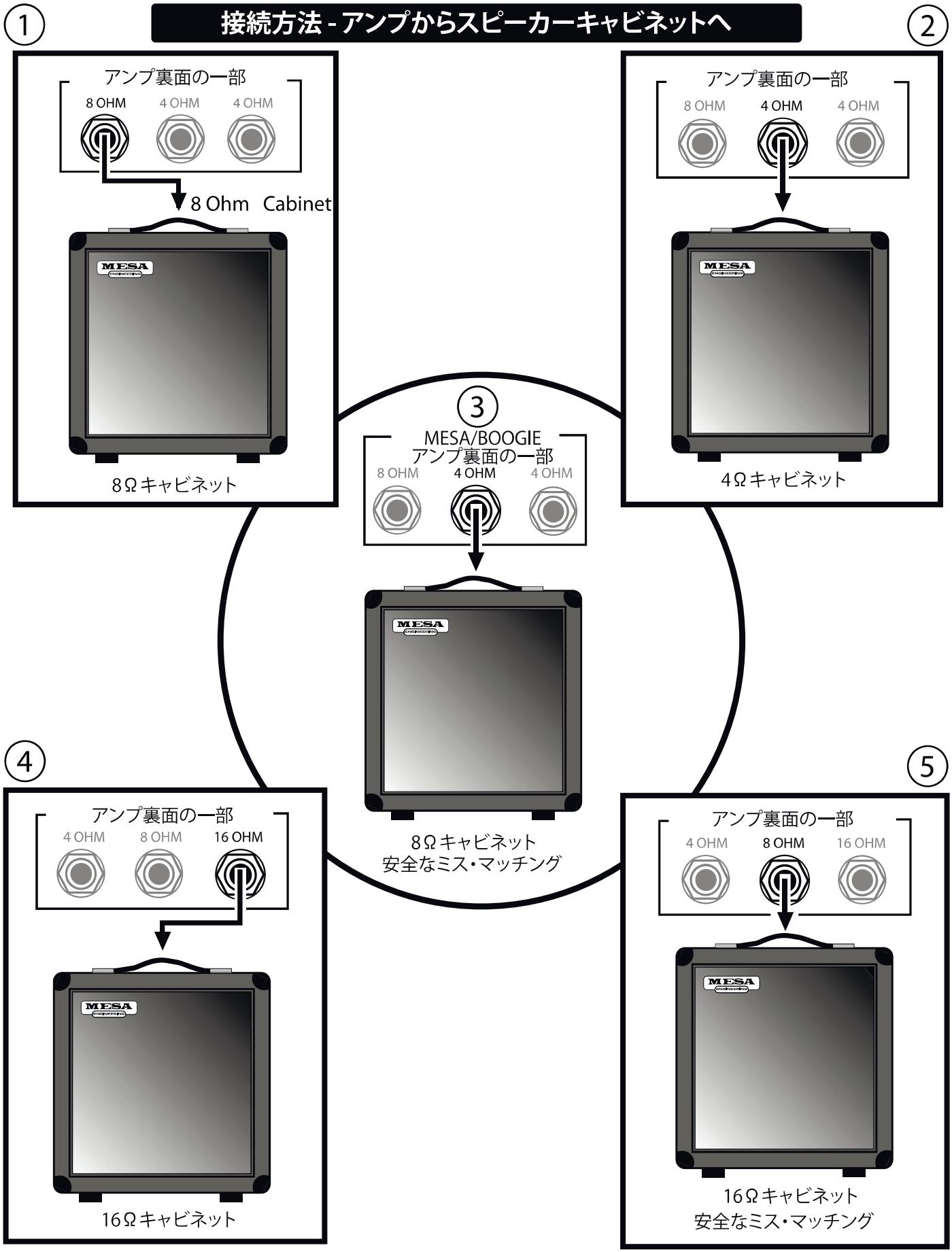
スピーカーAのプラス端子とスピーカーCのプラス端子を接続。

スピーカーAのマイナス端子とスピーカーBのプラス端子を接続。次にスピーカーCのマイナス端子とスピーカーDのプラス端子を接続。

そして最後にスピーカーBのマイナス端子とスピーカーDのマイナス端子を接続します。

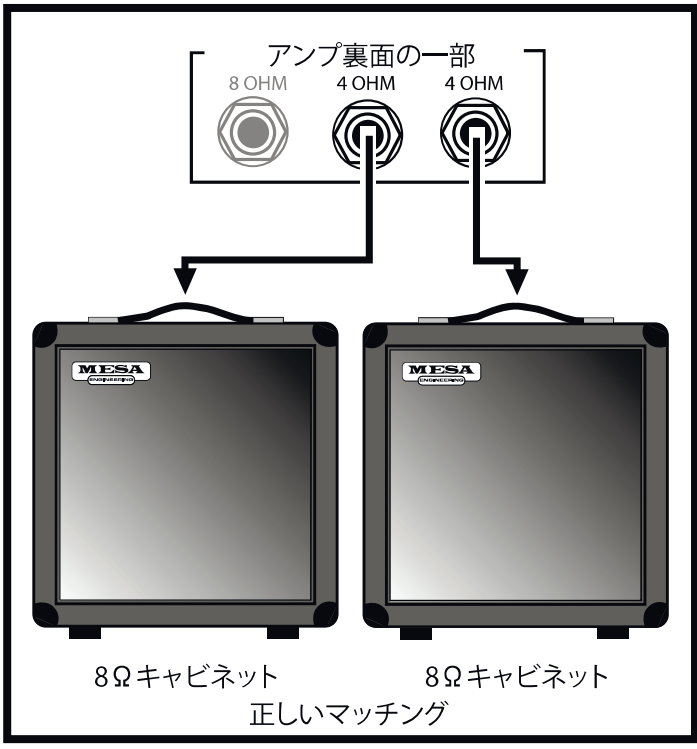
４台の８オーム・スピーカーをシリーズ・パラレル接続した時の合成抵抗値は、８オームになります。

接続方法 - アンプからスピーカーキャビネットへ



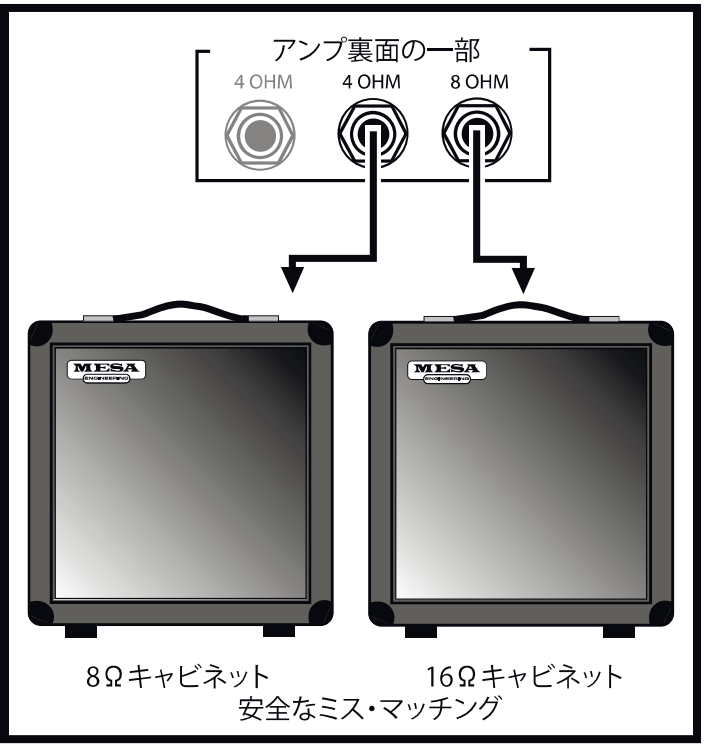
接続方法 - アンプからスピーカーキャビネットへ

6



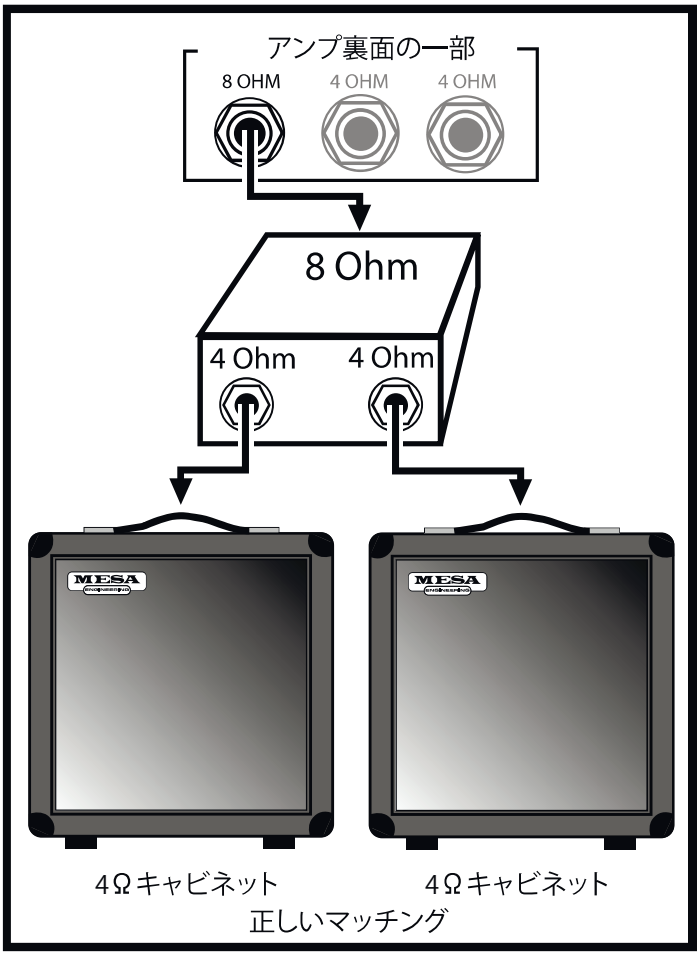
8Ωキャビネット　8Ωキャビネット
正しいマッチング

7



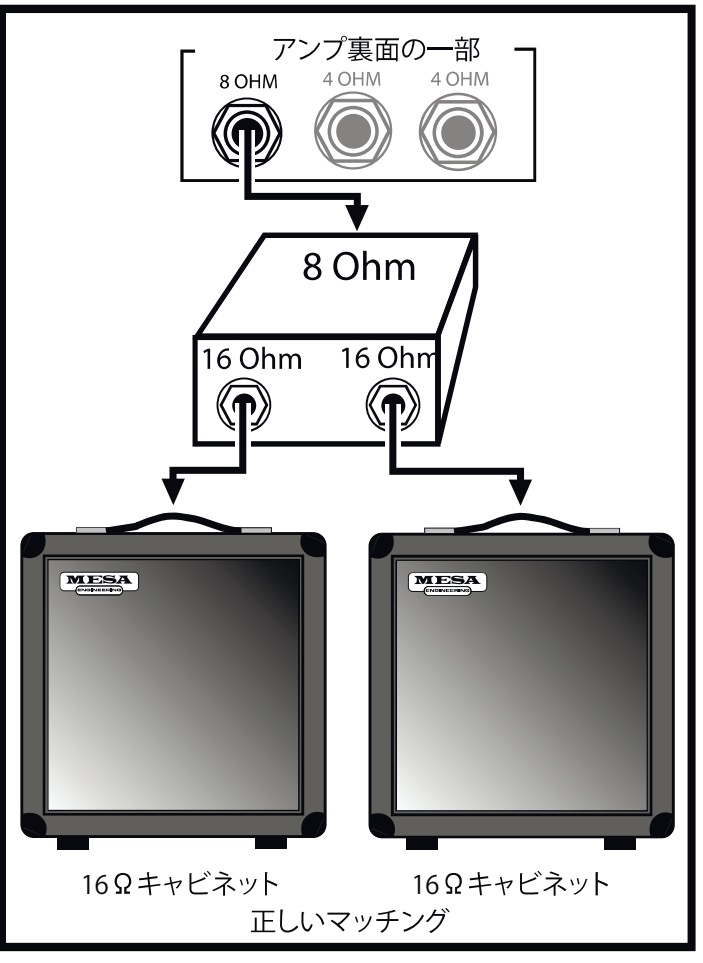
8Ωキャビネット　16Ωキャビネット
安全なミス・マッチング

8



4Ωキャビネット　4Ωキャビネット
正しいマッチング

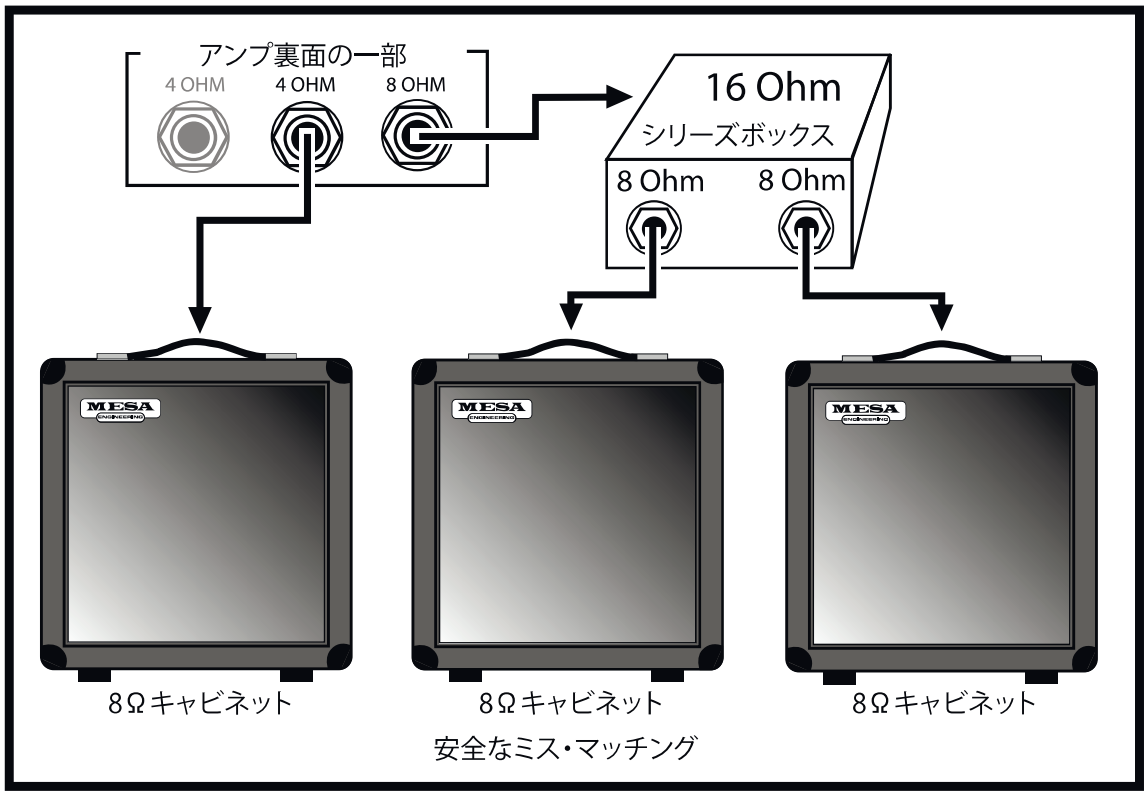
9



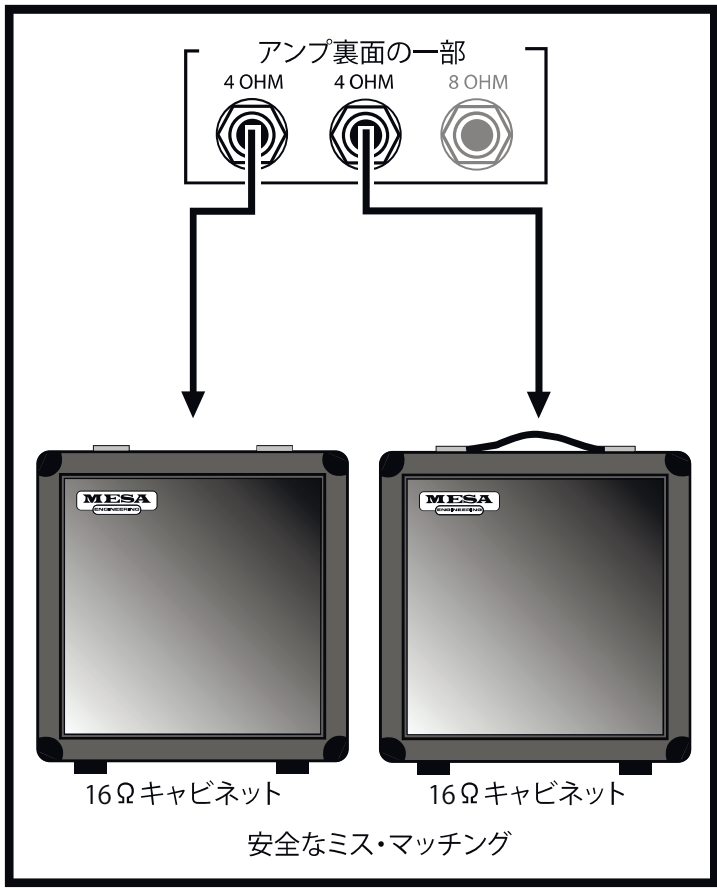
16Ωキャビネット　16Ωキャビネット
正しいマッチング

接続方法 - アンプからスピーカーキャビネットへ

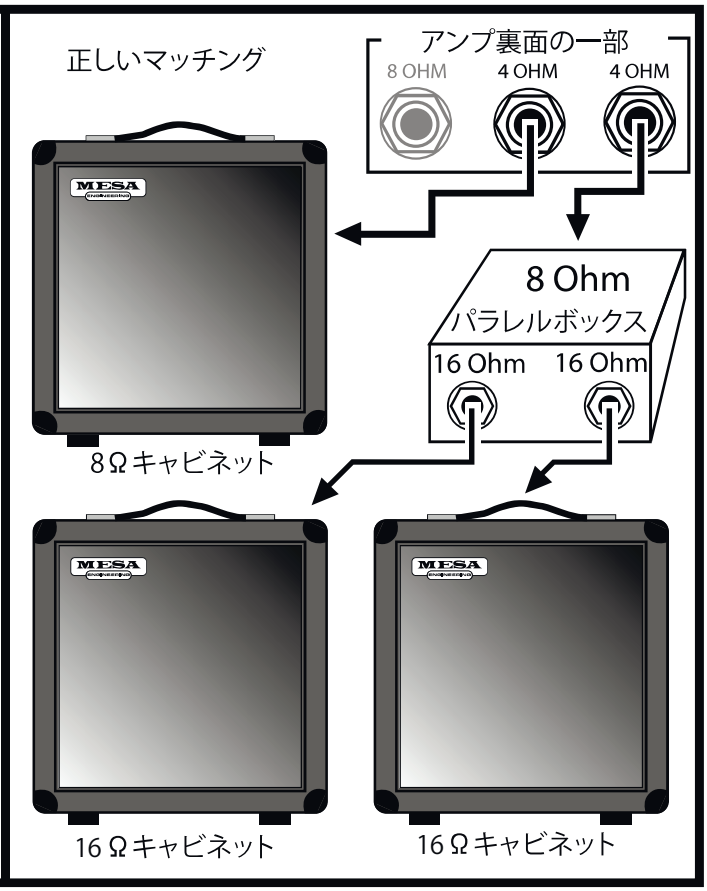
⑩



⑪

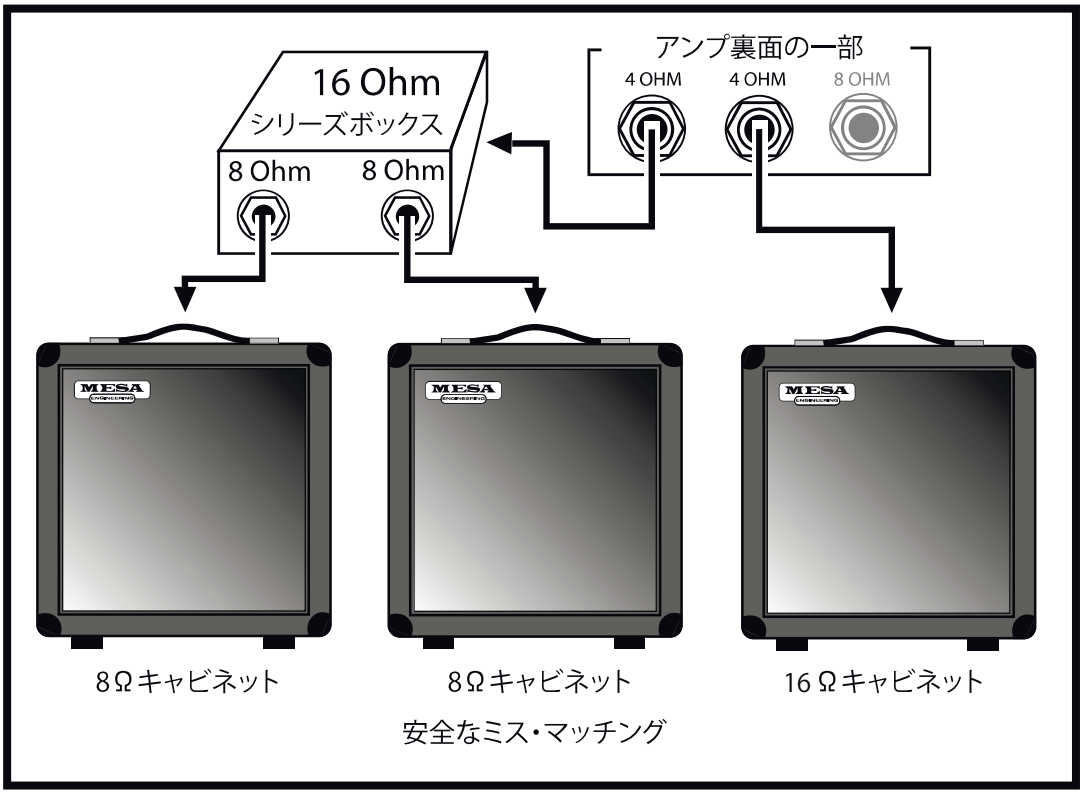


⑫

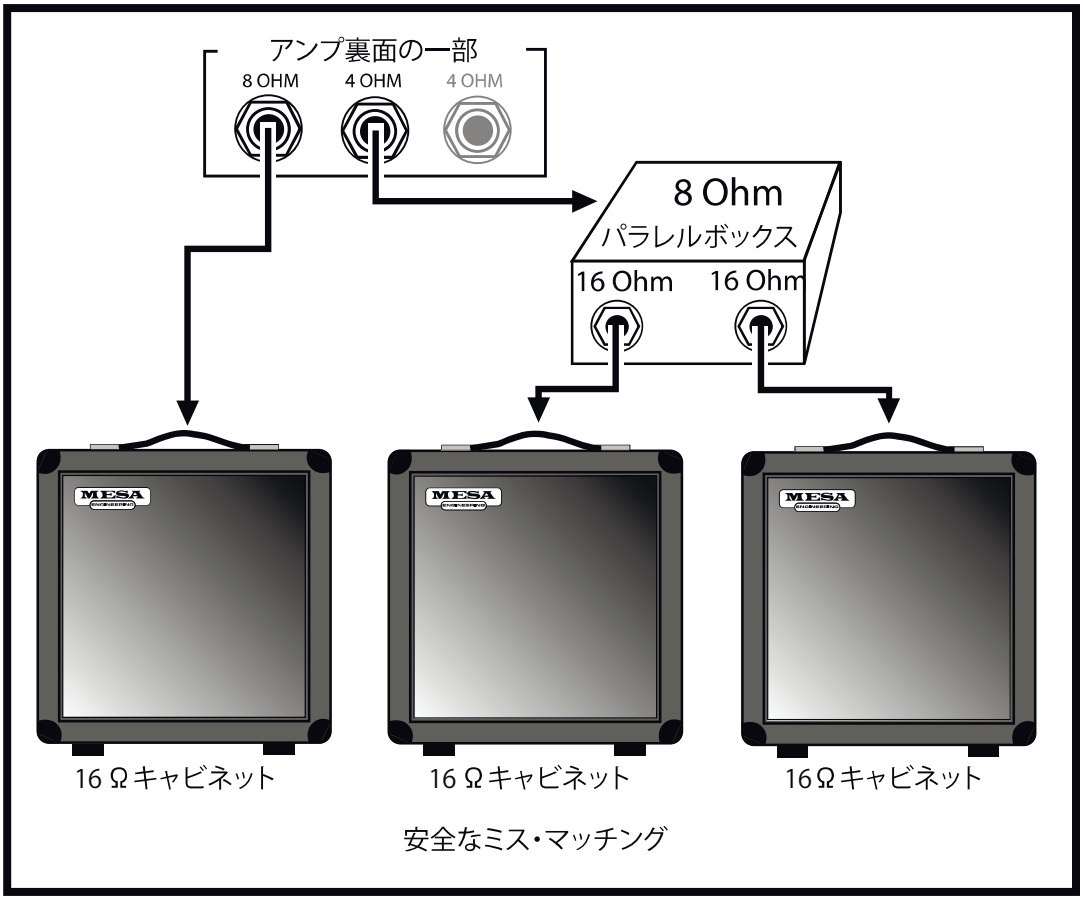


接続方法 - アンプからスピーカーキャビネットへ

⑬



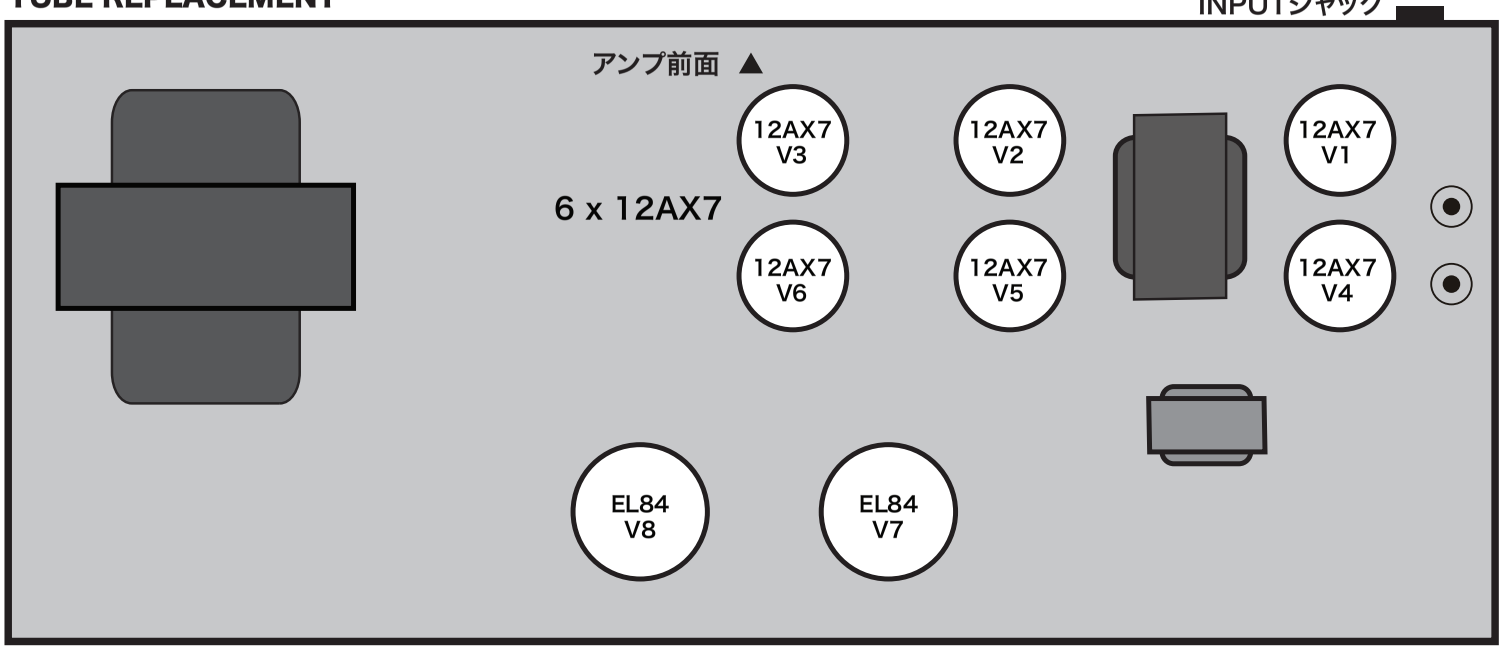
⑭



真空管を交換する前に、必ずPOWERとSTANDBYスイッチをOFFの状態にして下さい！

MARK FIVE:25 HEAD

TUBE REPLACEMENT



プリ管

V1A- 入力段 CH1 & CH2
V1B- Gainステージ第二段 CH1 CLEAN & FAT
Gainステージ第三段 CRUNCH
Gainステージ第二段 CH2

V2A- Gainステージ第二段 CH1 CRUNCH
V2B- Gainステージ第四段 CH2

V3A- Gainステージ第三段 CH1 CLEAN & FAT
Gainステージ第四段 CRUNCH
V3B- Gainステージ第四段 CLEAN & FAT

V4A- リバーブ・リターン
V4B- リバーブ・センド

V5A- エフェクトループ・リターン
V5B- Gainステージ第五段 CH2

V6A&B- ドライバー/フェイズインバーター

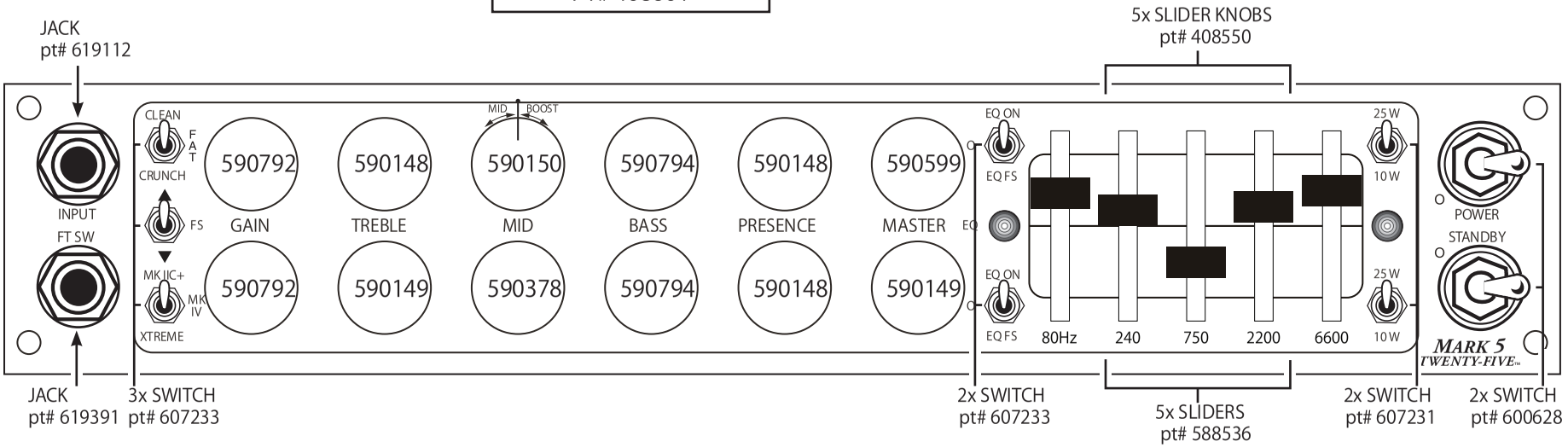
パワー管

25 Watts = V7. V8　五極管

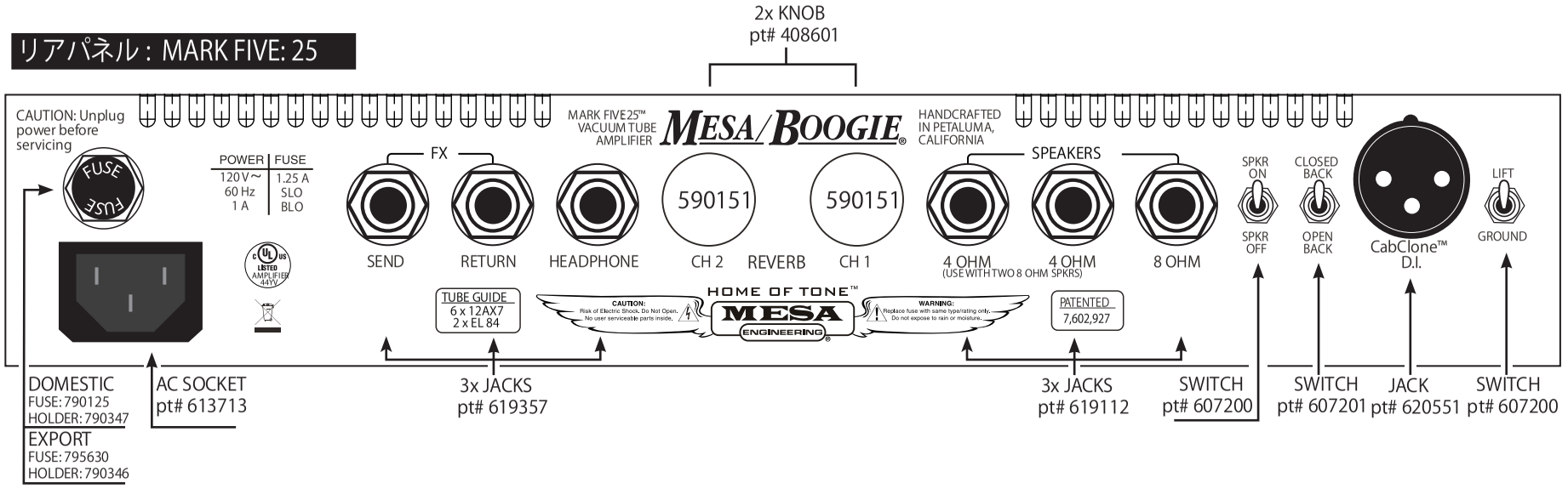
10 Watts = V7. V8　三極管

フロントパネル : MARK FIVE : 25

ALL FRONT PANEL KNOBS
PT# 408601



リアパネル : MARK FIVE: 25



NOTES

NOTES

The Spirit of Art in Technology™

MESA ENGINEERING®

正規輸入代理店

株式会社　キョーリツコーポレーション

カスタマーサポート

〒103-0012
東京都中央区日本橋堀留町 1-9-11
　NEWS 日本橋堀留町ビル 10F
TEL : 03-5614-4133 FAX : 03-5614-2166
E-MAIL : support@kcmusic.jp